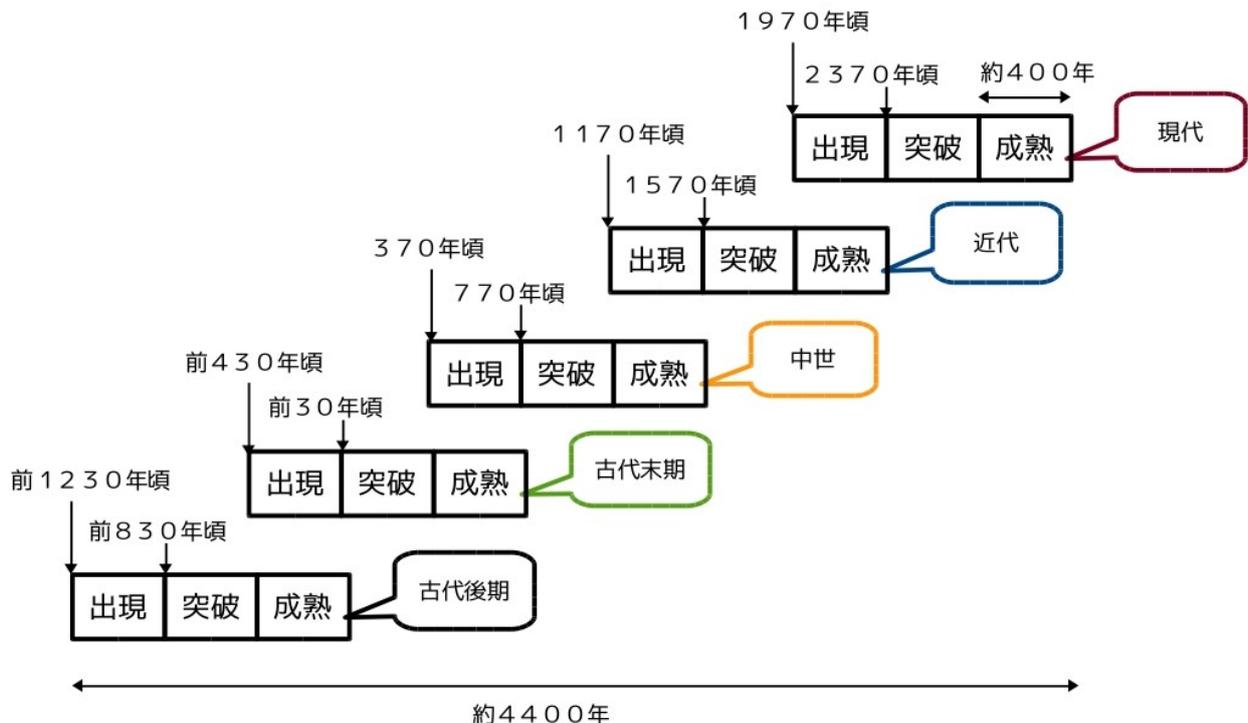


9. 「広義の中世」の成熟期と「広義の近代」の出現期の第4四半期(15世紀後半～16世紀後半)

9.1 レベル4パースペクティヴの拡大

柄谷行人氏は、著書「世界史の構造(岩波書店)」で筆者のレベル4パースペクティヴより大きなパースペクティヴを考案して人類史の変遷を論じている。下図(図13)は柄谷氏のパースペクティヴの抽象である(柄谷氏は、S字カーブモデルにまったく言及していない。したがって、下図は筆者の想像図であるが、柄谷氏にも満足していただける想像図であると思う)。

図13 柄谷行人氏のパースペクティヴ



紀元前4000～紀元前2800年頃までが古代初期である。人類最古の「王」が登場した紀元前2800年頃からウル第三王朝が滅ぶ紀元前2000年頃までが古代前期の出現期と突破期である。ウル第三王朝滅亡後、メソポタミアでふたつの王朝(イシン朝とラルサ朝)が併存するが、紀元前1830年頃に誕生したバビロン第一王朝＝古バビロニアがメソポタミアを再統一する(筆者の認識では、ハンムラビ王が編纂したと伝えられている「ハンムラビ法典」は戦後処理および戦利品の分配規定である)。

だが紀元前1530年頃、小アジアのヒッタイトが古バビロニアを滅ぼす。そしてシリアとメソポタミア北部を支配し、他方、カッシートがメソポタミア中部と南部を支配する。しかし紀元前1230年頃、ヒッタイトで内乱で勃発し、紀元前1190年頃、「海の民」がヒッタイトを滅ぼす。その後ヒッタイトが占有していた冶金技術＝製鉄技術がユーラシア大陸各地に伝わる(紀元前12世紀に地球が寒冷化している。それが、ヒッタイトが滅亡した原因である、と論じる考古学者もいる)。

ウル第三王朝が滅んだ紀元前2000年頃からヒッタイトが滅ぶ紀元前1200年前後までが、古代中期の出現期と突破期である。ヒッタイト滅亡後、アッシリアがメソポタミアとエジプトを統一し、最初の帝国を建国した。他方、インドで十王戦争が勃発し、アーリア人がカイバル峠を越えてインド北西部のパンジャーブ地方に侵入する。そして中国の王朝が商＝殷から周に変遷する。

(十王戦争で青銅製武器が使われたが、鉄製武器は使われていない。また、中国で鉄製武器の使用がはじまるのは呉越抗争が勃発した紀元前430年頃である。すなわち、ヒッタイト滅亡後、製鉄技術がユーラシア大陸全域に普及するまで約800年の歳月を要した。柄谷氏は、四種類の交換様式を定義して第4の交換様式＝交換Dに希望を見出しておられるが、筆者の認識では、鉄器がなかった頃の古代インドと古代中国＝周が「交換D」を具現している。おそらく、当時のインドと中国に奴隷制はなかった。とはいえアッシリア期のメソポタミア同様、征服者が被征服者を強制移動した可能性がある)

紀元前600年頃まで、アッシリアがメソポタミアを支配する。アッシリア崩壊後、カルデア＝新バビロニアがメソポタミアを支配し、リュディアが小アジア、メディアがイラン高原やアルメニアを支配する。その後ザグロス山脈中腹で誕生したアケメネス朝ペルシャがメディアを滅ぼし、イラン高原とアルメニアを支配した後、リュディアと新バビロニアも滅ぼして小アジアとメソポタミアを支配する。さらにシリアとパレスチナ、エジプトも支配した。他方、エーゲ海沿岸で古代ギリシャ都市国家が誕生する。

紀元前499年、ペルシャ戦争が勃発した。古代ギリシャ都市国家はアケメネス朝ペルシャ軍の侵攻を阻止し、紀元前449年にペルシャ王アルタクセルクセス1世と和約＝カリアスの和約を結ぶ。その後紀元前431年にペロポネソス戦争が勃発し、古代ギリシャで都市国家間の抗争がはじまる。

(「カリアスの和約」の存在を疑問視する歴史家が多い。仮に存在しなかったとしても、アケメネス朝ペルシャがエーゲ海以西への侵攻を断念し、古代ギリシャ都市国家がエジプトの独立支援を断念する何らかの合意があったと筆者は考える。現実には、アケメネス朝ペルシャはペロポネソス戦争にまったく関与していない)

ペロポネソス戦争は紀元前404年まで続くが、ヒッタイトが滅亡した紀元前1200年前後からペロポネソス戦争が勃発する紀元前430年頃までが古代後期の出現期と突破期である。その後アレクサンドロス3世がアケメネス朝ペルシャを滅ぼし、古代ギリシャ帝国＝ヘレニズム帝国を建国する。アレクサンドロス3世の死後、ヘレニズム帝国が瓦解し、古代ローマが膨張した。そして紀元前27年にオクタウィアヌスがアウグストゥスの称号を得、古代ローマの帝政がはじまる。

他方、中国では紀元前473年に越王勾践が呉王夫差を倒し、中原を制覇する。その後中国の歴史が春秋時代から戦国時代に変遷する。そして紀元前221年、始皇帝が秦帝国を建国し、紀元前141年に前漢の武帝が即位する。

武帝の死後、匈奴で内乱が勃発し、5名の有力者が単于に即位した。紀元前33年、ひとりの単于＝呼韓邪単于(こかんやせんう)が前漢に入朝し、後宮の王昭君を娶る。その後匈奴は北匈奴と南匈奴に分裂し、前漢と匈奴の抗争がなくなる(筆者の認識では、呼韓邪単于の入朝が最初の「入朝」で、そこから中国の帝政時代がはじまる)。

ユーラシア大陸東西の古代帝政期、3世紀の「グレート・リセット」やサーサーン朝ペルシャが誕生する頃までのグローバル・ヒストリーは2章で論じた。ペルシャ戦争やペロポネソス戦争、中国の春秋時代から戦国時代への変遷、その後の古代帝政期と中世帝国の誕生に着目すれば、ペロポネソス戦争が勃発した紀元前430年頃から中世帝国が誕生する西暦370年頃までが古代末期の出現期と突破期である。

ユーラシア大陸東西の同時代性を重視するのであれば、紀元前1200年前後が世界史＝グローバル・ヒストリーの起点になる。その意味で、柄谷氏のパースペクティヴは妥当である。また、柄谷氏はアケメネス朝ペルシャが最初の帝国であると認識しておられるようだが、それも妥当である。

だが、アケメネス朝ペルシャやアルサケス朝ペルシャとサーサーン朝ペルシャは政体(官僚体制と統治体制)が大きく異なる。しかし、柄谷氏は帝国を古代帝国と中世帝国に仕分けていない(アケメネス朝ペルシャやアルサケス朝ペルシャとサーサーン朝ペルシャを比較するより、中国の秦漢帝国と隋唐帝国を比較するほうが分かり易いかもしれない。秦漢帝国は古代帝国で、隋唐帝国は中世帝国である)。

古代末期の出現期と突破期にユーラシア大陸東西で古代帝国が盛衰し、古代末期の成熟期および「広義の中世」の出現期に中世帝国が誕生した。そして中世帝国と中世帝国の間に財貨の等比交換が生じる。すなわち、経済空間に貨幣経済が生じた。

(筆者の認識では、「広義の中世」がはじまるまで、貨幣経済は誕生していない。紀元前600～紀元前500年頃から、古代ギリシャ都市国家やアケメネス朝ペルシャが銀貨を鑄造したが、古代ギリシャ都市国家とアケメネス朝ペルシャ間で両替＝貨幣交換が行われたとの記録がない。ちなみに、金貨が普及したのは古代ローマ期であるが、ローマ金貨とローマ銀貨の交換は行われていなかったように思う)

「広義の中世」の出現期に、共同体間の交換関係と異質な帝国間の交換関係が生じた。すなわち、両替＝貨幣交換＝等比交換関係が生じた。しかし社会学者や経済学者たちは、共同体間の交換関係を論じ、貨幣の商品化＝貨幣商品説を論じるが、帝国間の交換関係を論じ、貨幣の制度化＝貨幣法制説を論じる場面がない。

だが、共同体間の交換関係と帝国間の交換関係は交換の順位がちがう。共同体間の交換関係は物品交換が先行するが、帝国間の交換関係は貨幣交換が先行する。筆者の認識では、帝国間の交換関係が貨幣法制化の起源である。

古代後期と古代末期を除けば、柄谷氏のパースペクティヴと筆者のレベル4パースペクティヴは同じであるが、しかし柄谷氏は共同体と共同体の交換関係を論じながら帝国と帝国の交換関係を論じていない。したがって、貨幣の制度的側面を論じる場面もない。コラム41で、マルクスや岩井克人氏は経済空間の順序構造を見落としていると述べたが、柄谷氏も見落としているように思う。

多くの社会学者や哲学者、経済学者や政治学者が貨幣と貨幣の交換関係＝両替を軽視し、帝国と帝国の交換関係を軽視している。彼らは、古代ローマや古代アケメネス朝ペルシャをしばしば論じるが、ビザンツ帝国やサーサーン朝ペルシャをあまり論じない。彼らが論じる「帝国」は、たいがい古代帝国で、彼らにとって、ビザンツ帝国もサーサーン朝ペルシャも「古代帝国」である。そのため、彼らは帝国を論じる場面があっても、帝国と帝国の交換関係を論じる場面がない。

ちなみに、歴史を深く遡行することなく現代の順序構造＝貨幣経済を考察することもできる。東西冷戦期の米ドルと露ルーブルの交換レートは概ね1対1で固定していた。筆者は、この巨大固定相場が現代の貨幣経済(あるいは「通貨」体制)を考察する手がかりになると考えるが、経済学者たちは軽視している(コラム64)。

前章で、14世紀後半～15世紀後半頃までの「広義の近代」の出現期後半を論じたが、本章で15世紀後半～16世紀後半までの「広義の近代」の出現期後半を論じる。「広義の近代」の出現期後半は人類史の大きな転換期であるが、15世紀後半～16世紀後半の変動は14世紀後半～15世紀後半の変動より大きい。

むしろ重要な場面は、経済空間に市場経済が生成する場面である。とはいえ、市場経済下で政体が変わる場面がかなり遅れる。すなわち、人間を支配する体制の下で自然(農地や森林、鉱物資源)も支配する時代が本格化するのは16世紀後半～17世紀後半になる。

(14世紀後半の日本は、南北朝期の戦乱を制圧した室町幕府が武家体制を整え、将軍足利義政の下で東山文化が栄えた。しかし15世紀後半に応仁の乱が勃発する。15世紀後半～16世紀後半の日本は戦国時代である。ヨーロッパや中国だけでなく、日本も含めて15世紀後半～16世紀後半の変動は大きい)

コラム64： 経済学者の傲慢な言説

経済学者の水野和夫氏は、榊原英資氏との共著「資本主義の終焉、その先の世界(詩想社)」で、資本主義経済の起点をローマ教皇庁が金利を認めた13世紀初頭に置き、現在の低金利やゼロ金利(あるいはマイナス金利)を根拠に「資本主義の終焉」を語っている。しかし、9～10世紀のビザンツ帝国で財貨に金利が生じている。金利のはじまりは物品貨幣の消滅と商品経済の生成を意味するが、資本主義経済のはじまりを意味しない。

家畜や穀物のような物品貨幣と金貨や銀貨のような財貨が併存し、貨幣クラスを形成していた時代は物品貨幣に利息が生じ、金利が法制化する場面はなかった。物品貨幣消滅後、金利が法制化する。だが、水野氏は物品貨幣の存在と消滅に気づいていない。

また水野氏は、蒐集を人類の普遍的法則であるかのように論じ、資本主義経済を論じている。だが日本政府と電力資本はプルトニウムを蒐集するために54基もの原発をつくったわけではない(3.11原発事故が勃発した場面で、水野氏は文明批判を繰り返し、正面から原発に反対する場面がなかった)。

筆者の考えでは、資本主義経済は人間労働が商品化＝労働力化して人間存在の商品化＝奴隷化を代替する18世紀後半からはじまる。人間存在が商品化していた時代＝重商主義時代は、分業による剰余＝絶対的剰余価値が生じる場面があっても、協業による剰余＝相対的剰余価値が生じる場面がほとんどなかった。しかし、水野氏は奴隷が産出する絶対的剰余価値と労働者が産出する相対的剰余価値のちがいを考えたことがおそくない。

貨幣と貨幣経済はちがうし商品と商品経済もちがう。市場と市場経済はちがうし資本と資本主義経済もちがう。重要なことは、貨幣経済と商品経済、市場経済、そして重商主義経済と資本主義経済はちがう、ということである。だが水野氏は、「ちがいを無視して傲慢な言説を繰り返している。

9. 2 神聖ローマ皇帝カール5世下の西ヨーロッパ

1519年、神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世が死去する。マクシミリアン1世の死後、フランス王フランソワ1世が皇帝選挙に立候補したが、ハプスブルク家からマクシミリアン1世の孫カール(スペイン名カルロス)も立候補する。

カールの父フィリップが1506年に死去したため、ハプスブルク家は他に人材がいなかった。とはいえ、カールは1500年生まれで、すでに成人している。しかも母方の祖父フェルナンド2世が1516年に死去したため、スペイン王に即位していた。スペイン王カールは各選帝侯に多額の銀を贈賄し、選挙で圧勝して神聖ローマ皇帝カール5世(在位1519~1556年)に即位する。

(スペイン王カール=神聖ローマ皇帝カール5世に多額の銀を提供したのは南ドイツの豪商ヤーコブ・フッガーである。カール5世の祖父マクシミリアン1世は、1490年にオーストリア大公に即位した。そしてチロル地方の鉱山=シュヴィーツ鉱山の採掘権をフッガー一家に与えた。おかげでフッガー家は莫大な私財を築く。ヤーコブ・フッガーはさらなる採掘権を欲していたように思う。他方、フランス王のイタリア支配を恐れるローマ教皇レオ10世が金10トン分に相当する贖宥状をヤーコブ・フッガーに与え、彼の銀提供を支援する。その後ドイツで贖宥状がバラ撒かれ、それが宗教改革運動の一因になる。社会学者や経済学者たちは、贖宥状のバラ撒きをもっぱら当時のマインツ大司教アルブレヒトの野心やサン・ピエトロ大聖堂の建設資金問題に置き換えているが、レオ10世が多量の贖宥状をヤーコブ・フッガーに与えたことが大きい)

ところで、カールは叔母マルグリットの下で育ち、彼の弟フェルディナントが祖父フェルナンド2世の下で育った。したがって本来、カールがネーデルラントやオーストリアを領有して神聖ローマ皇帝に即位し、弟フェルディナントがスペイン王に即位すべきである。しかしマクシミリアン1世にカールをスペイン王にしなければならない理由があった。

マクシミリアン1世は、自身が死去した後の神聖ローマ皇帝を指名していない。彼はカールの神聖ローマ皇帝即位よりネーデルラントの安寧を願っていた。そして、ネーデルラントをフランス王やイングランド王の侵略から守るには、スペイン王の力が必要である、と考えていたように思う。年長のカールがスペイン王に即位すれば、その分、ネーデルラントの安寧が先行する。

だが、カールの叔母マルグリットにそのような考えはない。当時の彼女は、旧ブルゴーニュ公領のすべてをフランスから奪還しなければならない、と考えていたように思う。カールは叔母の意思にしたがい、皇帝選挙に立候補する。

他方、フランス王フランソワ1世は1515年に即位した後、イタリア遠征を再開してミラノを奪還している。彼はイタリア全土を支配するつもりでいた(少なくとも、イタリア半島北部=ミラノ公国とイタリア半島南部=ナポリ王国を支配するつもりでいた)。

フランソワ1世が皇帝選挙に立候補したのは、穏便にイタリア全土を支配するためであったと思う。しかし皇帝選挙で敗北したフランソワ1世は、武力でイタリア全土の支配を目指す。

1521年、フランソワ1世率いるフランス軍がネーデルラントとスペインに侵攻し、イタリアにも侵攻した。ドイツ軍とスペイン軍が反撃し、フランス軍は撤退する。その後フランス軍元帥シャルル・ド・ブルボンの妻が死去する。彼女の領地をフランソワ1世が没収し、王領化した。シャルル・ド・ブルボンは反旗を翻すが、フランソワ1世に察知され、神聖ローマ帝国に亡命する。

他方、1521年にローマ教皇レオ10世が死去し、後を継いだハドリアヌス6世も約2年後に死去する。ハドリアヌス6世の死後、クレメンス7世がローマ教皇に就任した。そしてフランソワ1世のミラノ支配を容認する(クレメンス7世はフィレンツェのメディチ家出身である。当時、フィレンツェはミラノ公国と敵対していた。ちなみに、レオ10世もメディチ家出身であるが、系譜がちがう)。

1524年、フランソワ1世率いるフランス軍が再度イタリアに侵攻してミラノを占領し、その後隣接するパヴィアを包囲する。だが1525年、シャルル・ド・ブルボン率いるドイツ傭兵軍がフランス軍を撃退し、フランソワ1世を捕縛する。

(義兄のアランソン公シャルル4世やナバラ王エンリケ2世もフランソワ1世のイタリア遠征に帯同していた。パヴィア戦役後、シャルル4世が死去する。エンリケ2世は、フランソワ1世同様捕縛されたが、脱出に成功する。その後シャルル4世に嫁いでいたフランソワ1世の姉マルグリットと結婚する。そしてマルグリットとの間に後のナバラ女王ジャンヌ・ダルブレが生まれ、彼女が初代ブルボン朝フランス王アンリ4世を出産する。ジャンヌ・ダルブレは大変な女傑で、しかも熱心な新教徒であった)

1526年、カール5世とフランソワ1世がマドリッド条約を締結し、旧ブルゴーニュ公領がすべて神聖ローマ帝国の版図になる。その後カール5世はフランソワ1世を釈放した。だが、釈放後、フランソワ1世は条約を破棄する。そしてローマ教皇庁やフィレンツェ、ヴェネツィア等とコニャック同盟を結び、神聖ローマ帝国に敵対する。

他方、フランソワ1世を捕縛したシャルル・ド・ブルボンは、フランソワ1世を憎んでいたが、彼が支払う身代金でドイツ傭兵(ランツクネヒト)の給金を支払うつもりでいた。したがってフランソワ1世を殺害しなかったわけだが、旧ブルゴーニュ公領を得たカール5世は身代金を要求しない。金に困ったシャルル・ド・ブルボンは、「反コニャック同盟」を口実にしてローマ市に進軍する。1527年、ドイツ傭兵団がローマ市を破壊した。

(後述する宗教改革運動に影響されていたドイツ傭兵たちにとって、ローマ教皇は「アンチ・クリスト」である。しかも、シャルル・ド・ブルボンが初日に戦死したため、指揮官を失ったドイツ傭兵たちは暴徒化する。だが、カール5世は、「事件は当方が関知することなく発生したものであり、まことに遺憾とする」との書簡を各諸侯に送り、ドイツ傭兵たちの「ローマ市略奪」を傍観した)

1528年、フランソワ1世率いるフランス軍がミラノとナポリに侵攻する。しかしカール5世からスペインとシチリア間の貿易独占権を得たジェノヴァ提督アンドレア・ドーリアがナポリ沿岸の海上封鎖を解除し、スペイン軍に兵站を送る。1529年、フランス軍はランドリアーノの戦いで大敗し、撤退した。

その後カール5世と教皇クレメンス7世が和解し、カール5世の叔母マルグリットとフランソワ1世の母ルイーーズ・サヴォワが和約＝カンブレの和約(貴婦人の和約)を結ぶ。フランスはイタリアから全面撤退し、他方、マドリッド条約で失った旧ブルゴーニュ公領を取り戻す。そして1530年、クレメンス7世の嫡男アレッサンドロ・デ・メディチがカール5世から公爵位を得、フィレンツェが「公国」になる。

(当時、ジェノヴァはフランスと同盟を結んでいた。したがってドーリアの行為は裏切りである。だが、オスマン帝国がコンスタンティノープルを攻略してクリミア・ハン国を併合したため、ジェノヴァは黒海の通商権を喪失していた。スペインとシチリア間の貿易独占は、衰退した通商都市国家ジェノヴァの存亡を左右する利権である。歴史家の故フェルナン・ブローデルは、16世紀を「ジェノヴァの時代」と呼んだが、ジェノヴァの繁栄はドーリアの裏切りからはじまる。ちなみに、上で述べたアレッサンドロ・デ・メディチは1537年に同族のロレンツィーノに殺害された。カール5世は再度メディチ家出身のコジモに公爵位を与える。そして1555年、フィレンツェ公コジモ1世がシエーナを占領する。その後メディチ家が保有していたスペイン債権を放棄してスペイン王フェリペ2世からシエーナ併合の承認を得、1559年に「トスカーナ大公国」を開国する。彼は1571年のレバント海戦にも参戦した。レバント海戦後、ジェノヴァは黒海の通商権を回復する。そして、シチリア産穀物だけでなく、クリミア半島沿岸からポーランド・リトアニア産穀物も輸送しはじめる)

ところで、1521年にフランス軍がネーデルラントとスペインに侵攻する少し前、カール5世は南ドイツのヴォルムスで帝国議会を開催してマルティン・ルターを召喚している。そしてルターをアハト刑(神聖ローマ帝国内での権利と財産をすべて剥奪する刑)に処している。

当時、ルターはヴィッテンベルク大学の神学教授で、万人司祭論(聖書を読むことを通してすべてのキリスト教徒が神と直接的な関係を持つこと)を提唱していた。そして1517年、ローマ教皇レオ10世が発行する贖宥状に反対し、「95カ条」の論題をヴィッテンベルク城教会の門扉に張り出す。その後何者かが「95カ条」をドイツ語に翻訳し、「95カ条」の印刷物がドイツ各地に流布する。

カトリック教会とローマ教皇庁にとって、「95カ条」は大きな障害になった。1520年、レオ10世はルターを破門したが、ルターの支持者は増え続けた。カール5世がルターをアハト刑に処したのは、事態を穏便に解決するためである(アハト刑は、皇帝が封建諸侯から領地等を没収する場面で下す刑罰であり、聖職者に下す刑罰ではない。カール5世は、ルターを火刑から救うために、彼をアハト刑に処したのかもしれない)。その後ザクセン選帝公フリードリヒ3世がルターを庇護する。ルターはザクセン選帝公の庇護下で聖書のドイツ語訳を執筆する。

(ルターは聖書のドイツ語訳を執筆したが、ラテン語の聖書をドイツ語に訳したわけではない。彼はエラスムスがギリシャ語に訳した聖書をドイツ語に訳した。当時、ヨーロッパの知識人たちは「ビザンツの知」を懸命に学んでいた。したがって、ギリシャ語は知識人の必須語であり、エラスムスはギリシャ語の教材を提供する目的でギリシャ語の聖書を執筆した。そしてギリシャ語を取得した司祭や司教たちが古代ギリシャの哲学や自然学、あるいはビザンツ帝国の国法＝バシリカ法を学ぶことを期待していたように思う。ちなみに、エラスムスはルターのドイツ語訳を歓迎したが、ルターの思想や運動に賛同しなかった)

ヴォルムス帝国議会後、ヴィッテンベルクやアウクスブルク、strasブルク(strasブール)やメミンゲン等で宗教改革運動がはじまる。とはいえ、運動を担ったのは主に商工業者で、彼らの運動目的は概ねカトリック教会の儀式や10分の1税の廃止等であり、カトリック教会の荘園支配を揺るがず場面はあっても封建諸侯の領地支配を揺るがず場面はなかった。

だが、宗教改革運動は農村に広がり、農民の運動が封建諸侯の領地支配を揺るがす。ドイツ各地の農民運動はメミンゲンの牧師シャッペラーが起草した「12カ条」を共有して運動を展開した。以下はシャッペラーが起草した「12カ条」の概要である。

- 1) 福音(聖書朗読)の自由、牧師の自由な選出
- 2) 10分の1税の正しい使用あるいは廃止
- 3) 農奴身分の撤廃
- 4) 狩猟の自由
- 5) 共有地の自由な用益
- 6) 賦役の軽減
- 7) 賦役に対して反対給付があるべきこと
- 8) 地代の適正化
- 9) 新形式裁判の撤廃
- 10) 個人の手に戻した共有地の返還
- 11) 相続税(死亡税)の完全撤廃
- 12) 要求根拠の正当性

福音の自由や牧師の自由な選出、10分の1税の廃止等は商工業者たちも要求していた。また16世紀のドイツでは、農奴身分や相続税(死亡税)はかなり縮小している。したがって、それら要求は現状の追認に近い。農民団体は、賦役の軽減や賦役に対する反対給付、地代の適正化等も要求しているが、しかし廃止を要求しているわけではない。狩猟の自由や新形式裁判の撤廃等が封建諸侯の領地支配を揺るがしたとも考えにくい。封建諸侯の領地支配を揺るがしたのは、おそらく「共有地の自由な用益」と「個人の手に帰した共有地の返還」である。

瀬原義生氏の著書「皇帝カール5世とその時代(文理閣)」によれば、14世紀後半のヴィッテンベルク伯領では、領主の所領地＝農地は4105モルゲンであったが、そのうち領主が直営していた農地は906モルゲンで、残りはすべて小作農に貸与していた(1モルゲンは0.25～0.33ヘクタールである)。そして小作農は収穫の3～5割を領主に「納税」していた。16世紀のヴィッテンベルク伯領では、領主が直営する農地はさらに縮小していたと考えられ、ドイツ全体がそのような状況にあったと推測できる。

したがって、当時のドイツ封建諸侯にとって直営農地の拡大が最優先課題であった。そしてカトリック教会の支配が緩い共有地が強奪のターゲットになる。他方、農民団体の共有地拡大要求は封建諸侯に対する事実上の農地返還要求である。だが、封建諸侯は農民団体の要求に応じない。1524年、ドイツで内戦＝ドイツ農民戦争が勃発した。「戦争」は1525年まで続き、農民団体＝ドイツ農民軍は惨敗する。

ちなみに、ルターは農民を裏切っている。当初、彼は農民の運動に同情的であった。だが「12カ条」を読んだ後、反動的になる。彼は「農民の12カ条に対する平和勸告」を書いて農民に譲歩を要求し、農民の運動が激化した場面で、檄文「農民の殺人・強盗団に抗して」を各諸侯に送る。そして、とりわけミュールハウゼンの農民運動指導者トマス・ミュンツァーを罵り、ミュンツァーとミュンツァーの運動に参加する農民たちを殺害すべきである、と論じた。ルターの「檄文」にどれほどの重みがあったかはわからないが、ドイツ農民戦争で約10万の農民が「戦死」した。

1525年にドイツ農民戦争が終結し、翌1526年に第一回シュパイアー帝国議会が開催され、ルターはヴォルムス帝国議会決議の留保を得た。その後ルターを支持するドイツ封建諸侯たちが自領内のキリスト教会を自身の支配下に置き、「カトリック」を排除する(コラム65)。

スイスでもフルドリヒ・ツヴィングリがチューリヒを拠点にして宗教改革運動を推進していた。運動はスイス各都市に広がる。運動の過程で、分派＝再洗礼派が誕生し、ツヴィングリは彼らを弾劾する。再洗礼派の指導者たちは殺害された(その後再洗礼派はスイスを離れドイツに移る。そしてドイツ農民戦争で疲弊したミュンスターで「千年王国」を建設するが、ルター派と争い消滅する。ちなみに、当時の再洗礼派と現在の再洗礼派は異なる。当時の再洗礼派にはカルト的などころがあった)。

ツヴィングリの宗教改革運動は苦難の連続であったが、やがてスイスでも万人司祭論＝聖書主義が広まる。だが、スイスの封建諸侯たち(彼らはカトリック教会の信徒でもある)が反発する。1529年、第一次カペル戦争が勃発した。そして1531年、第二次カペル戦争が勃発し、ツヴィングリは戦死する。しかしスイス＝チューリヒの宗教改革運動＝改革教会派は残る。そして1549年、ジュネーヴの宗教改革運動＝カルヴァン派と合流する。

ところで、神聖ローマ皇帝カール5世は、フランスとの戦争に時間を費やしていたため、ドイツ農民戦争にまったく関与していない。しかしランドリアーノの戦いでフランス軍を撃退した後、時間的余裕が生じた。1529年、カール5世はローマ教皇クレメンス7世と和解し、第二回シュパイアー帝国議会を開催して第一回シュパイアー帝国議会の決議を無効にする。翌1530年、ポローニャで戴冠式を開催し、弟のオーストリア大公フェルディナントを次期皇帝に指名した後、アウクスブルク帝国議会を開催してルター派やツヴィングリ派との和解を模索する。

だが、ヘッセン方伯フィリップがルター派とツヴィングリ派の大同団結、およびカール5世と帝国議会に抵抗する同盟＝プロテスタントの結成を試みる。1531年、ドイツ封建諸侯は同盟＝シュマルカルデン同盟を結成した。中心人物は、ザクセン選帝公ヨハン・フリードリヒ(ルターを庇護したフリードリヒ3世の甥)であったが、ツヴィングリ派のヘッセン方伯フィリップも合流する。

1532年、カール5世はレーゲンスブルク帝国議会を開催して大同団結を呼びかけ、その後オスマン海軍の制圧に赴く。カール5世がドイツに戻るのは約10年後の1541年になるが、その間、シュマルカルデン同盟を結んだルター派ドイツ封建諸侯は自領内のキリスト教会支配＝カトリック排除を貫徹し、フランスやデンマークと同盟を結ぶ(コラム66)。

(当時、フランソワ1世はオスマン帝国と同盟を結び、カール5世に敵対していた。フランスはカトリック国であるが、オスマン帝国と同盟を結んだフランソワ1世にルター派ドイツ封建諸侯との同盟を拒絶する理由はない。他方、グラーク戦争＝伯爵戦争で宿敵リューベクを倒し、スウェーデンと50年の休戦条約を結んだデンマーク王クリスチャン3世は宗教改革を推進していた。ルター派国王クリスチャン3世にとって、ルター派ドイツ封建諸侯との同盟は当然である。シュマルカルデン同盟を強固にしたドイツ封建諸侯たちは、自領内のカトリック排除を貫徹するが、目的はカトリック教会が所有する農地＝荘園と農民＝農奴の強奪である。本音丸出しでカトリック排除を行った「馬鹿」はブランデンブルク・クルムバッハ辺境伯アルブレヒトくらいのものであるが、カトリック排除により、ドイツ封建諸侯たちは自身の徴税圏＝領邦を形成する)

1541年、カール5世がレーゲンスブルクに帰還する。帰還後、フランソワ1世と再度戦火を交えたが、1544年にクレピヤ条約を結んで和睦する。そしてオーストリア大公フェルディナントとオスマン帝国スルタン・スレイマン1世の和睦を確認した後、新ローマ教皇パウルス3世(パウロ3世。クレメンス7世は1534年に死去している)から多額の戦費を得てルター派ドイツ封建諸侯の征伐を開始する(当時、スペイン国内の富財の約8割をカトリック教会が収奪していた。カール5世がパウルス3世から得た戦費はカトリック教会がスペインの貴族や民衆から収奪した富財である)。

フェルディナントと和睦したスレイマン1世は、オスマン軍の矛先を東方のサファヴィー朝ペルシャに向けていた。したがって、カール5世に後顧の憂いはない。1546年、神聖ローマ帝国とシュマルカルデン同盟の戦争＝シュマルカルデン戦争が勃発する。1547年、ミュールベルクの戦いでカール5世下のネーデルラント軍とスペイン軍が大勝し、ザクセン選帝公ヨハン・フリードリヒとヘッセン方伯フィリップが捕縛された(ちなみに、シュマルカルデン戦争が勃発する少し前にルターが死去し、ミュールベルクの戦いの少し前にフランソワ1世とイングランド王ヘンリー8世が死去している)。

ミュールベルクの戦い後、カール5世はアウグスブルク仮信条協定を制定してカトリック教会とルター派ドイツ封建諸侯の融和を試みる。だが、アウグスブルク仮信条協定は概ねカトリック教会の主張の沿ったもので、ルター派ドイツ封建諸侯がカトリック教会から強奪した農地の領有を保証する文面がない。そのため、カール5世に合流し、ヨハン・フリードリヒ捕縛後にザクセン選帝公の地位を得たヨハンの甥モーリッツの立場が危うくなる。

他方、カール5世は中世都市の市政改革を断行し、さらに新通貨法＝アウグスブルク通貨法を制定して公布する。筆者の認識では、アウグスブルク通貨法が本位貨幣制と銀本位制のはじまりである。

「広義の近代」の出現期に有価証券(手形や債券)が誕生した。5章で、北宋が発行した政府手形＝交子や南宋が発行した政府債券＝会子について述べたが、ヨーロッパでは、13世紀後半からヴェネツィア商人やジェノヴァ商人、ハンザ商人が証券取引所を設立して有価証券を発行しはじめる。

とはいえ、ヴェネツィア商人はヴェネツィア、ジェノヴァ商人はジェノヴァに証券取引所を設立したにすぎない。だが、ハンザ商人はバルト海沿岸各都市と北海沿岸各都市(ハンブルクやアントウェルペン)に証券取引所を設立する。

15世紀前半、英仏百年戦争下で「通貨戦争」が勃発し、金銀複本位制が崩壊した。ハンザ商人たちは、信頼できる決済手段を一時失う。おそらく、新たな決済手段として、大型銀貨が誕生した。15世紀後半から、神聖ローマ帝国で大型銀貨＝グルディナー銀貨の鑄造がはじまる。そして1518年、ボヘミアの新銀山＝ザンクト・ヨアヒムスター(チェコ名ヤーヒモフ)銀山でターラー銀貨＝ヨアヒムスターラー銀貨が鑄造され、他方、1523年を最後にフローリン金貨の鑄造と発行が終焉する。

翌1524年、カール5世は通貨法＝エリスゲン通貨法を公布し、グルディナー銀貨とヨアヒムスターラー銀貨を等価にする。ヨアヒムスターラー銀貨は重量29.2グラム、銀純度93.75パーセントの銀貨になる。その後ドイツのブラウンシュヴァイク銀山等でも「ターラー銀貨」の鑄造がはじまるが、他方、グルディナー銀貨の銀純度が低下する。したがって、カール5世が1551年に公布したアウグスブルク通貨法の目的は、銀貨の一元であった。ターラー銀貨は重量31.18グラム、銀純度88.2パーセントの銀貨になり、さらにグルデン金貨の基本単位になる(以後、本書では「ターラー」と「グルデン」を同じ貨幣単位として扱う。ちなみに、ターラーは「ドル」の語源である)。

筆者のレベル4パースペクティブに従えば、アウグスブルク通貨法を制定して公布した場面でカール5世の歴史的役割は終わったと言える。カール5世の死後、アウグスブルク通貨法が改定され、ターラー銀貨は重量が少し軽くなるが、銀含有量は変わらない。商品交換＝商品売買の場面でも決済の場面でも銀貨が使われるようになり、銀貨が本位貨幣になる。そして、ヨーロッパの通貨制度が金銀複本位制から銀本位制に移行した。

18世紀中頃まで、ターラー銀貨は質＝銀含有量を維持した。信頼できる本位貨幣＝銀貨が有価証券の大量発行を可能にし、重商主義下で信用取引が増大する。

(1523年にフローリン金貨が歴史的役割を終えたが、100種類以上の異なるグルデン金貨の発行が続いていた。したがって、金貨は残る。とはいえ、不揃いなグルデン金貨による決済は商人の負担が大きい。16世紀中頃～18世紀中頃まで、ヨーロッパの本位貨幣は銀貨である。先に、経済空間に商品経済が生成する必要条件は物品貨幣の消滅であると述べたが、経済空間に市場経済が生成する必要条件は交換手段と決済手段の一元であり、すなわち貨幣の本位貨幣化である。本位貨幣の下で産業が一次産業と二次産業、三次産業に分離する。それにより人間労働が専門化し、分業が生じる。ちなみに、16世紀後半以降の産業分離と人間労働の専門化、あるいは分業化は、ユーラシア大陸東西で生じているが、日本のように奴隷労働が存在しない国家では身分制に重畳する。すなわち、江戸時代の「土農工商」は身分制であると同時に産業分離であり、人間労働の分業である)

1547年、フランス王フランソワ1世が死去する。フランソワ1世の死後、彼の次男アンリがフランス王アンリ2世に即位する。そしてザクセン選帝公モーリッツとシャンボール条約を結ぶ。

アンリ2世の目的は旧ブルゴーニュ公領の奪還、モーリッツの目的はカトリック教会から強奪した領地や領民の領有であった。シャンボール条約締結後、アンリ2世は多額の戦費をモーリッツに供与し、モーリッツはヘッセン方伯フィリップの嫡男ヴィルヘルムやブランデンブルク・クルムバッハ辺境伯アルブレヒトを交えてカール5世を襲撃する。カール5世は遁走し、アンリ2世は旧ブルゴーニュ公領を奪還した。

1552年、オーストリア大公フェルディナントが仲裁してカール5世とモーリッツがパッサウ協定を結び、ルター派ドイツ封建諸侯がカトリック教会から強奪した農地や農民の領有が確定する。またヴィルヘルムが父フィリップの釈放を得る。

しかし領地の拡大を望んでいたアルブレヒトに不満が募る。アルブレヒトは他のルター派ドイツ封建諸侯の領地を略奪しはじめた。1553年、ジーファースハウゼンの戦いでモーリッツがアルブレヒトを破り、略奪を阻止するが、モーリッツは戦死する。

他方、フッガー一家から多額の戦費を得たカール5世が傭兵を雇い、フランスに侵攻するが、ギーズ公フランソワが防戦する。カール5世は撤退し、そして1555年、オーストリア大公フェルディナントがアウグスブルクで帝国会議を開催して18カ条の平和令＝アウグスブルク宗教和議を決議する。以後、神聖ローマ帝国でカトリック教会とルター派協会＝プロテスタント教会の併存がはじまる。

翌1556年、カール5世は引退し、1558年に死去する。カール5世の死後、オーストリア大公フェルディナントが神聖ローマ皇帝フェルディナント1世(在位1556～1564年)に即位し、カール5世の長男フェリペがスペイン王フェリペ2世(在位1556～1598年)に即位した。

旧ブルゴーニュ公領を奪還しても、フランス王アンリ2世の野心は萎えなかった。カール5世引退後、アンリ2世率いるフランス軍がネーデルラントに侵攻する。だが、スペイン軍総司令サヴォイア公フィリベルトがフランス軍を撃退する。そして1557年のサン・カンタンンの戦いでフランス軍に大勝した。

1559年、フランスとスペインはカトー・カンブレジ条約を締結する。カトー・カンブレジ条約下で、フェリペ2世とアンリ2世の娘エリザベート、フィリベルトとアンリ2世の妹マルグリットが婚約する。しかし結婚の祝宴で催した馬上試合でアンリ2世が死去する(ちなみに、フェリペ2世はイングランド女王メアリ1世と結婚していたが、メアリ1世は1558年に死去している)。

本書では、対抗宗教改革やイエズス会、カルヴァン派プロテスタント等の動向に言及しない。アンリ2世の死後、フランスで勃発した宗教戦争＝ユグノー戦争(1562～1598年)にも言及しない(約36年続いたユグノー戦争は、薔薇戦争同様、作家にとって最良の歴史素材かもしれないが、本書の主旨から離れている)。

ユグノー戦争後、フランス王家がヴァロワ家からブルボン家に変遷するが、ブルボン朝フランス王がイタリアに野心を抱く場面はなかった。ナポレオン・ボナパルトが1796年にイタリア遠征を行うまで、フランス軍がイタリアに侵攻する場面はない。歴史家たちは、1494年にシャルル8世がイタリア各地を領有し、1559年のカトー・カンブレジ条約締結まで約65年続いたフランスと神聖ローマ帝国およびスペインの戦争を「イタリア戦争」と呼んでいる(コラム67)。

コラム65: トマス・ミュンツァーの信条

カール5世が開催したヴォルムス帝国議会で、ルターは325年にローマ皇帝コンスタンティヌス1世が開催した第一回ニカイア公会議に遡行して「95カ条」の正しさを主張し、万人司祭論＝聖書主義を主張した。しかしミュンツァーは「聖霊主義」である。すなわち、聖書は外在する最高法規であり、心の中で聖霊＝神と接することが信仰である、と論じた。

ミュンツァーは、カトリック教会だけでなく、教会そのものを否定していた可能性がある。ミュンツァーの信条は後のキリスト友会＝クエーカーに近い。ルターがミュンツァーを「悪魔の頭目」と罵った理由はそれかもしれないが、「共有地の自由な用益」と「個人の手に戻した共有地の返還」を要求した当時のドイツ農民にとって、教会廃止は必要なことであったように思える。

ミュンツァーは第一回ニカイア公会議を超え、原始キリスト教(アルメニア・キリスト教等)に遡行していたのかもしれない。ミュンツァーの死後、ミシェル・セルヴェが「三位一体の誤謬について」という本を書き、聖書のどこにも三位一体が書かれていない、と論じた。セルヴェは投獄され、脱獄してジュネーヴに身を寄せるが、カルヴァン派に捕らえられて火刑に処せられた(カルヴァンにミュンツァーの「情熱」はない。彼も「教会」に固執していた。ちなみに、セルヴェは優れた医師で、血液循環説を提唱している)。

同時代の日本で、約92年(1488～1580年)、「百姓の持ちたる国」が存続している。場所は北陸である。作家の五木寛之氏が、著書「一向一揆共和国・まほろばの闇(筑摩書房)」で蓮如の信条と一向一揆を解説しておられるが、筆者には蓮如が語った「阿弥陀如来の本願にすがり、一心に極楽往生を信ずる」とミュンツァーの信条＝聖霊主義に大きなちがいはないと思える。

蓮如は寺院の廃止を唱えなかったが、各家庭に仏壇を設置して僧侶が訪問する仕組みを整えた。それにより、寺院が「小型」化して分散する(ちなみに、五木氏は当時の北陸が「共和国」化していたと論じておられるが、筆者はアジール＝避難所化していたと考える。世界のいたるところで、長い戦乱期に巨大なアジールが誕生している。アジール内の経済は共産主義経済である)。

歴史家や社会学者が、ドイツ農民戦争と一向一揆を比較する場面はない。また宗教学者や哲学者たちが、ミュンツァーの信条やキリスト友会＝クエーカーと浄土真宗を比較する場面もない。他方、カルヴァン派はルター派よりラディカルである、などと論じたりしている。だが、カルヴァンは教会廃止を主張したわけではないし、三位一体も擁護した。今もプロテスタント教会とカトリック教会、そして東方正教会が三位一体説を保持し続けている。筆者には、それが既存のキリスト教会からカルト教団が生じる原因になっているように思えるのだが、大きな問題が他にある。ユダヤ教とイスラーム教に三位一体説はない。

コラム66: 「帝政論」

1519年にカール5世が神聖ローマ皇帝に即位したとき、マクシミリアン1世の側近ガッティナーラが宰相に就任する。ガッティナーラを推挙したのは、おそらく叔母のマルグリットである。ガッティナーラは、ダンテの「帝政論」に傾倒していたが、開明的なマルグリットもダンテの作品を愛読していたように思う。

ダンテの「帝政論」はマキアベリの「君主論」とまるでちがう。ダンテがプラトンの著書「国家」を読んだかどうかは不明であるが、彼は、皇帝は神にもっとも近い人間存在でなければならない、と論じている。そして、私有財産を持つてはならない、あるいはほとんど持つてはならない、と論じている。ダンテにとって、神聖ローマ皇帝はローマ教皇以上に聖なる存在でなければならない。即位後、カール5世はそのようなダンテ主義者の具申を得ながら執政に携わった。

1529年にカール5世がポローニヤで戴冠した後、翌1530年にガッティナーラが死去し、しばらくして叔母のマルグリットも死去する(マルグリットの死後、カール5世の妹マリアがネーデルラント総督に就任する)。だが筆者の見るところ、ガッティナーラとマルグリットが死去してもカール5世はダンテ主義を放棄しなかった。カール5世は多額の債務を抱えたが、それが債務であると認識していなかったように思う。他方、彼の緩い弾圧と寛容さ(プロテスタント諸侯を緩く弾圧しながら彼らの領有権を容認した)の原点も、おそらく「ダンテ主義」にある。

コラム67: テューダー朝イングランド王国の宗教改革

カール5世と同時代のイングランド王はヘンリー8世(在位1509～1547年)である。女王の即位も可能になっていたが、国王が戦場に赴く時代が続いている。ヘンリー8世は嫡男の誕生を望み、離婚と再婚を繰り返した。しかしローマ教皇クレメンス7世は彼の離婚や再婚を認めない。

1534年、ヘンリー8世は立法議会(パーラメント)の決議を得てイングランド国教会をカトリック教会から分離し、首長令=国王至上法を制定する。そして、国王至上法に反対するジョン・フィッシャーやトマス・モアを処刑した。とはいえ、混乱期間が意外に短い。

ヘンリー8世がジョン・フィッシャーやトマス・モアを処刑したのは1535年で、1537年に三人目の王妃ジェーン・シーモアが嫡男エドワードを出産している。嫡男を得たヘンリー8世はイングランドの勢力拡大に邁進する。

イングランド王家が、ウェールズを実質支配するようになったのは、ヘンリー8世の代からである。邁進するヘンリー8世をカンタベリー大司教トマス・克蘭マーが支えた。そしてイングランド国教会のプロテスタント化を推進する。ヘンリー8世の死後、彼の嫡男エドワードが9歳でイングランド王エドワード6世に即位するが、エドワード6世の代も克蘭マーはプロテスタント化を推進し続ける。イングランドのカトリック教会は荘園と農奴を失い、修道院が消滅した。

だが1553年にエドワード6世が死去し、ヘンリー8世の最初の王妃キャサリンが出産したメアリーがイングランド女王メアリー1世に即位する。そしてカトリック教会への回帰を宣言し、肅清をはじめ。克蘭マーは処刑され、プロテスタント化を推進していた多数の司祭も処刑された。

しかし1557年、メアリー1世の夫スペイン王フェリペ2世が破産宣告する。夫の破産救済に奔走するメアリー1世に王領化したカトリック教会の領地や領民を返還する余裕はない。カトリック教会は修道院を復活することもできなかった。彼女の代に、イングランドはフランス領カレーも失う。

メアリー1世の死後、ヘンリー8世の二人目の王妃アン・ブーリンが出産したエリザベスがイングランド女王エリザベス1世(在位1558～1603年)に即位する。そしてイングランド国教会=プロテスタントが復活する。

ところで、筆者の認識では、カトリック教会はもちろんであるが、ルター派教会であれカルヴァン派教会であれ、イングランドを除けば、国王が国教会の長に就任する国家は西ヨーロッパに存在しない。ただし、すでに述べたが、ビザンツ帝国では東方正教会の総司教もビザンツ皇帝の臣下である。克蘭マーが、イングランド国教会のプロテスタント化を推進する過程で、ビザンツ皇帝と東方正教会の関係を模倣した可能性がある。

ちなみに、イングランドはビザンツ帝国の国法=バシリカ法を導入している。ギリシャ化したとはいえ、古代ローマを継承したビザンツ帝国はバシリカ法の下で議会=元老院も相応の力を持っていた。ビザンツ帝国は、皇帝の下で元老院が立法府化していた、とも言える。その点でも、克蘭マーはビザンツ帝国を模倣した可能性がある。

(当時のヨーロッパで法治主義を具現したのは、法学部を有する各国の「大学」であるが、バシリカ法の翻訳や読解もオクスフォード大学の仕事であった。おそらく、イングランドはテューダー朝期に「ビザンツ」化した。それが、後の大英帝国のスキームにも影響を及ぼしたように思う。前章のコラム57でも述べたが、とりわけ所有権の導入が大きい。すでに述べたが、中世の支配者層にとって、人間の支配と土地や資源の支配は別の仕事であった。しかし「広義の近代」の出現期と突破期から、支配者層は人間の支配を通して土地や資源も支配するようになる。支配者層は、そのためのテコとして、所有権を利用した)

9.3 八十年戦争の勃発

カール5世の叔母マルグリットの死後、カール5世の妹マリアがネーデルラント総督に就任する。マリアはハンガリー王ラヨシュ2世と結婚していたが、1526年のモハーチの戦いでラヨシュ2世が戦死したため、未亡人になっていた。マリアとラヨシュ2世の間に子供がいない。そこで、ラヨシュ2世の姉アンナと結婚していたカール5世の弟フェルディナント(オーストリア大公フェルディナント)がボヘミア王とハンガリー王に即位する。

だが、トランシルヴァニア領主サポヤイ・ヤーノシュもハンガリー王に即位する。ハンガリー王国は「西ハンガリー王国」と「東ハンガリー王国」に分裂した。そして、ヨーロッパ諸国が西ハンガリー王国を支援し、オスマン帝国が東ハンガリー王国を支援する。

1529年、スレイマン1世率いる約12万のオスマン軍がオーストリアの首都ウィーンを包囲する。歴史家たちは、このウィーン包囲を「第一次ウィーン包囲」と呼んでいるが、フェルディナント下のオーストリア軍が奮戦し、オスマン軍は撤退した。その後1533年に講和が成立し、フェルディナントは東ハンガリー王国を承認する(コラム68)。

他方、1535年にカール5世率いるドイツ・イタリア・スペイン連合軍が北アフリカに上陸してチェニス(現在のチュニジア共和国チュニス市)を制圧する。連合軍を輸送する艦隊を指揮したのはジェノヴァ提督アンドレア・ドーリアである。連合軍は監禁されていた2万のキリスト教徒を解放し、その後ローマに凱旋した。

チェニスで大敗したオスマン海軍提督バルバロス・ハイレッディンは、アルジェ(現在のアルジェリア民主人民共和国の首都)に逃れ、その後エーゲ海諸島を荒らす。1538年、アンドレア・ドーリア率いるスペイン・ジェノヴァ・ヴェネツィア連合艦隊とバルバロス・ハイレッディン率いるオスマン艦隊がイオニア海で一戦交えた。連合艦隊に大きな損害はなかったが、歴史家たちが「プレヴェザの海戦」と呼んでいるこの海戦でオスマン艦隊が勝利する。そして1540年、ヴェネツィアがオスマン帝国に屈服し、エーゲ海とイオニア海の制海権を失う。

1541年、カール5世は再度大艦隊を編成してアルジェ制圧を試みる。だが、悪天候下で上陸を強行したため、艦隊が座礁し、さらに陸戦でも惨敗する。アンドレア・ドーリア率いる艦船がかるうじて座礁を逃れ、味方兵士を救出した。カール5世と連合軍は帰還できたが、再度のアルジェ制圧を断念するしかなかった。その後バルバロス・ハイレッディンはイタリアやスペインの地中海沿岸を荒らし回り、1546年にコンスタンティノーブル=イスタンブルで死去する。

1556年、カール5世は引退し、オーストリア大公フェルディナントが神聖ローマ皇帝フェルディナント1世(在位1556~1564年)に即位する。他方、カール5世の嫡男フェリペがスペイン王フェリペ2世(在位1556~1598年)に即位するが、翌1557年、彼は破産宣告した。

(フェリペ2世の破産宣告は利払いを拒否する程度の破産宣告=バンカロータであった。しかし前節で述べたが、フィレンツェ公コジモ1世がメディチ家のスペイン債権を放棄している。その後コジモ1世はシエーナを併合して「トスカーナ大公国」を開国するが、フェリペ2世の破産宣告は続く。フェリペ2世は在位中に4度破産宣告した。1557年の破産宣告は最初の破産宣告である)

大航海時代については後述するが、当時のスペインは中南米から多量の銀を輸入していた。にもかかわらず、フェリペ2世は破産宣告した。

歴史家たちは、スペインの土地の大部分をカトリック教会が所有していたこと、そしてカール5世の代から続く戦役が破産宣告の原因である、と論じている。だが、カトリック教会の土地支配とたび重なる戦役が破産宣告の原因であったとしても、それらは遠因と言うべき原因である。直接的な原因=近因が他にある。世界史=グローバル・ヒストリーの研究者たちが、「近因」を解明しつつある。フェリペ2世が破産宣告した近因は、食料不足である。当時のスペインは穀物輸入国であった。

(困ったことに、一部の経済学者や社会学者が、当時の食料事情を無視して筆者には「馬鹿げている」としか思えない言説を論じている。経済学者や社会学者が論じる16世紀の「価格革命」はたいがい間違っている)

コラム57で、トマス・モアの著書「ユートピア」に言及したが、モアは羊の放牧が農地を破壊して人間を餓死させていると論じ、イングランドの第一次囲い込み=第一次エンクロージャを非難しているように見える。だが、イングランドでは、黒死病が蔓延した14世紀に農村や農家が1~2割の農地を放棄している。囲い込みの対象はそれら旧農地で、すなわち「荒地」である。したがって、当時のイングランドの農民人口や穀物生産量は減少していない。

経済学者や社会学者たちは、当時のデータを元にモアを嘲笑する。しかしモアが当時のスペインを意識して言ったのであれば、モアは正しい。当時のスペインは、モアが言うような「羊が人間を餓死させる」状況に陥っていた。コラム54で、イベリア半島のレコンキスタ運動に言及したが、イベリア半島で農耕に従事していた人々は大半がイスラーム教徒である。他方、キリスト教徒たちは牧羊に従事していた。イスラーム教徒を追放しても、キリスト教徒たちは農耕に従事しない。かるうじて、キリスト教に改宗した元イスラーム教徒=モリスコが農耕を続けたが、カール5世もフェリペ2世も、そしてフェリペ3世もモリスコを弾圧した。16世紀後半から、スペインの穀物生産量が減少する。

とはいえ、ジェノヴァ商人がクリミア半島やシチリア島から穀物を輸送している間は、食料不足が生じる場面はなかった。だが、バルバロス・ハイレッディン率いるオスマン海軍が地中海を支配した後、穀物輸送が一時困難になる。スペインは多額の銀を支払ってフランスやイングランドから穀物を購入するしかない状況に陥る。それが、フェリペ2世が破産宣告した「近因」である。

(ヨーロッパの人口は、黒死病が蔓延した14世紀に4000万～5000万程度に減少したが、16世紀後半頃までに倍増している。しかし穀物生産量は倍増していない。当時のヨーロッパは食糧難に陥っていた。それでも、イングランドやフランス、ドイツは穀物を自給していたし、イタリア半島では小麦より生産性が高くカロリーも高いコメの生産がはじまっている。カール5世もフェリペ2世も、元イスラーム教徒＝モリスコと和解し、オスマン帝国とも和解しなければならなかった。そして、スペインの農耕を再生し、またエジプトから安値で穀物を輸入することも考えなければならなかった。しかし、彼らの強固なカトリック信仰とカトリック教会が和解を困難にした。他方、スペインに穀物を輸送していたジェノヴァが莫大な「財」を蓄える)

1556年、スペイン軍総司令サヴォイア公フィリベルトがネーデルラント総督に就任する(前ネーデルラント総督マリアは引退し、1558年に死去する)。フィリベルトはサン・カンタンの戦いでフランス軍に大勝し、カトー・カンブレジ条約締結後、フランス王アンリ2世の妹マルグリットを娶る。マルグリットを娶ったフィリベルトはサヴォイア公国に戻り、その後フェリペ2世の異母姉マルゲリータがネーデルラント総督に就任する。そしてアントワヌ・ド・グランヴェルが大司教＝メヘレン大司教に就任した。

当時のネーデルラント17州は緩やかな連邦を形成してスペインに帰属していた。しかしルター派プロテスタントの反乱は概ね沈静していたが、メアリー1世の弾圧から逃れたイングランドのプロテスタントが移住し、フランスを追われたカルヴァン派プロテスタントも移住していた。

グランヴェルは、封建諸侯を国政から排除してプロテスタント弾圧を試みる。だが、諸侯たちは、グランヴェルの施政に反発する。とりわけオラニエ公ウィレムとエフモント伯ラモラル、ホールン伯フィリップの三者が反発した。彼らはカール5世に従軍して戦場に赴いた忠臣である。マルゲリータもグランヴェルの弁護を放棄したため、フェリペ2世はグランヴェルを解任する。しかしグランヴェルを解任してもネーデルラント諸侯の不満は解消しない。

(その後グランヴェルはスペインとヴェネツィア、ローマ教皇庁の同盟をまとめ、レパント海戦の戦勝に貢献する。さらに対ポルトガル外交や対フランス外交で成果を上げ、プザンソン大司教に就任した後死去する)

前節で述べたが、当時のスペインは土地の大部分をカトリック教会が保有し、富財の約8割を収奪していた。そして、スペインで生まれスペインで育ったフェリペ2世は、賢明な君主ではあったが、立法権と執行権を有する「立法者」の存在を知らない。すなわち、ビザンツ帝国がはじめた国法の制定と国法による法治主義の仕組みを知らない。

フェリペ2世は、自身が宰相に就任してカトリック教会と表裏一体化した「帝国」の建設に邁進する。他方、カトリック教会の収奪はネーデルラントにも波及し、諸侯が貧困に苦しむ。エフモント伯ラモラルがスペインに赴き、カトリック教会の収奪を抑止するよう嘆願した。しかし無駄であった(当時のネーデルラントも穀物を自給していない。バルト海沿岸から穀物を輸入していた)。フェリペ2世に嘆願を無視されたネーデルラントの諸侯たちは、マルゲリータに請願した。彼女は請願を受諾したが、状況は彼女の手にも負えないところまで悪化していた。彼女が請願を受諾した直後から、ネーデルラント各地で暴動が勃発する。

1567年、マルゲリータに代わり勇猛果敢なアルバ公フェルナンドがネーデルラント総督に就任して粛清を行う。多数のカルヴァン派プロテスタントと諸侯が刑死し、エフモント伯ラモラルとホールン伯フィリップも刑死した。その後フェルナンドは「不甲斐なき人民どもを粉碎した」との書簡をフェリペ2世に送る。だが、イングランドやフランスに逃れた諸侯やカルヴァン派プロテスタントが多数いた。オラニエ公ウィレムもドイツのナッサウに逃れた。

(オラニエ公ウィレムは、幼少の頃からカール5世の側近として仕え、スペイン軍副司令に就任している。彼の所領はライン川流域のナッサウであったが、ホラント、ゼーラント、ユトレヒトのネーデルラント3州を領有していた彼の従兄ルネ・ド・シャロンが嫡子を残すことなくイタリア戦争で戦死したため、ネーデルラント3州を領有した。当時、ナッサウは彼の弟ルートヴィヒの所領であった)

1566年、スレイマン1世が死去し、彼の嫡子セリムがオスマン帝国スルターン・セリム2世に即位する。セリム2世は凡庸な人物であったが、宰相ソコルル・メフメト・パシャが彼を支えた。1568年、オスマン帝国は神聖ローマ帝国と8年間の平和条約を結ぶ。その後フランスとの友好を拡大し、ロシアと講和した。そして1571年、キプロス島を攻略する(コラム69)。

キプロス島攻略後、オスマン海軍はレパント海戦でスペインとジェノヴァ、ヴェネツィアやローマ教皇庁等の連合海軍に大敗するが、地中海の制海権を保持し続けた。他方、1568年にオラニエ公ウィレムがネーデルラント3州の奪還を試みる(これがオランダ独立戦争のはじまりで、歴史家たちが「八十年戦争」と呼んでいる戦争のはじまりでもある)。そして1574年、ホラント州ライデン市でスペイン軍を撃退する。ネーデルラント諸侯やカルヴァン派プロテスタントが奮戦したが、カトリック教徒たちもアルバ公フェルナンドの執政に反発したため、戦争が泥沼化した。

カトリック教徒たちが反発した原因は、フェルナンドがすべての商品取引に課税した10%の売上税＝軍税である。カトリック教会の収奪があまりに大きいため、軍を維持するには軍税を制定するしかなかったのかもしれない。あるいは、軍税を徴税して分配しなければ、スペイン兵たちの略奪を抑止できなかったのかもしれない。だが、軍税はカトリック教会には無害であったが、カトリック教徒には有害であった。

1573年、フェリペ2世はアルバ公フェルナンドを更迭し、ルイス・デ・レケセンスが新たなネーデルラント総督に就任する。彼は軍税を廃止するが、その程度の打開策では解決できないところまで戦火が拡大していた。1576年、レケセンスはヘントの和約を結び、カルヴァン派プロテスタントを承認してスペイン軍を撤退させた。同年、彼は死去する。

レケセンスの死後、レバント海戦の英雄ドン・ファン・デ・アウストリア(フェリペ2世の異母弟。すなわち、カール5世の実子である)がネーデルラント総督に就任する。彼はヘントの和約を恒久化したが、撤退したスペイン軍を呼び戻し、弾圧を続けた。ネーデルラントの戦乱は続く。

1578年、ドン・ファン・デ・アウストリアが死去し、かつてネーデルラント諸侯たちが請願したマルゲリータの嫡男パルマ公アレクサンドロ・ファルネーゼがネーデルラント総督に就任する。

ファルネーゼもレバント海戦に従軍した勇敢な戦士だが、彼は有能な政治家でもあった。ファルネーゼは、ネーデルラント17州の状況を把握した後、1579年に南部10州だけの連合＝アラス連合を結成する。同年、北部7州がユトレヒト同盟を結成してアラス連合に対抗した。ネーデルラントの内戦はネーデルラント南部(以後、「ベルギー」と呼ぶ)とネーデルラント北部(以後、「オランダ」と呼ぶ)の領域間戦争に進展するが、ファルネーゼは戦闘を優位に展開しながらアラス連合の維持に努める。すなわち、オランダが占領していたベルギー領の奪還に専念し、オランダ領に侵攻する場面はなかった。

他方、1584年にオラニエ公ウィレムが狂信的なカトリック教徒に殺害され、窮地に陥ったオランダはイングランドとノンサッチ条約を結ぶ。イングランド女王エリザベス1世はレスター伯ロバート・ダドリーをオランダに送った。彼は「オランダ総督」に就任したが、しかし無能であった。1587年、ダドリーが帰国し、ウィレムの次男マウリッツがオランダ総督に就任する。

(パルマ公アレクサンドロ・ファルネーゼは、ベルギーがスペイン領であればそれでよいと考え、フェリペ2世もファルネーゼの考えに同意していたように思う。他方、フェリペ2世はイングランド征服を目論んでいた。そしてレスター伯ロバート・ダドリーはそれを認識していた。彼はオランダとスペイン・ポルトガル(スペインは1580年にポルトガルを併合している)の交易を制限する。しかしオラニエ公ウィレムに仕えていた法律家ヨーハン・ファン・オルデンバルネフェルトが反発する。それが、ダドリーが帰国した原因である。当時のオランダは、バルト海沿岸から穀物を輸入していた。他方、ポルトガルに(あるいはポルトガル経由でスペインに)穀物を輸送して銀を稼いでいる。中南米産の銀を得なければ、オランダはバルト海沿岸から穀物を輸入できない。ちなみに、オルデンバルネフェルトはオランダ東インド会社やアムステルダム銀行の創立もコーディネートした)

1588年、アルマダの海戦でスペイン海軍がイングランド海軍に大敗する。そして翌1589年、フランス王アンリ3世が殺害され、ブルボン家のアンリ＝アンリ4世が王位を継承する。フェリペ2世が反ブルボン家のカトリック勢力にテコ入れしたため、ファルネーゼは両面展開を強いられた。そして1592年、フランス戦役で戦死する。ファルネーゼを失ったベルギーは窮地に陥る。しかも1598年にフェリペ2世が死去したため、スペインは混乱した。

(ちなみに、アルマダの海戦で大勝した後のイングランドが大西洋を制覇したわけではない。アルマダの海戦で大敗したスペインは、海軍を強化し、イングランド海軍＝海賊船の略奪から商船団を守った。アルマダの海戦後の海戦は、概ねスペイン海軍がイングランド海軍に圧勝している。海賊ジョン・ホーキンスやフランシス・ドレークは活躍の場を失った)

ファルネーゼとフェリペ2世の死後、オランダ独立戦争はスペイン軍がオランダ軍の侵攻からベルギーを防衛する戦争に変貌する。マウリッツ率いるオランダ軍がベルギー各地を占領した。

だが1アンブロジオ・スピノラがベルギーに赴き、オランダの「侵略」に立ちはだかる。スピノラはベルギーの防衛に奮戦した。1609年、オランダはスペインと12年間の休戦協定を締結する(スピノラはジェノヴァの資産家の息子である。ジェノヴァでの政争に破れ、志願してスペインの傭兵になった)。

休戦協定締結後、スピノラは破産したが、1618年に勃発した三十年戦争で戦功を上げ大貴族＝グランデの名誉を得る。スピノラの下でスペイン軍が蘇生した。以後、ベルギーに駐屯するスペイン軍を「フランドル軍」と呼ぶ。三十年戦争期に、スペインはフランスとの国境に近い神聖ローマ帝国内の街道を経由して属国化したミラノ公国からフランドル軍に兵站を補給した。

コラム68: ユニテリアン教会の誕生

本文で述べたように、東ハンガリー王国は1526年のモハーチの戦いで大勝したオスマン帝国が獲得した領地であるが、スレイマン1世は独立を認め、トランシルヴァニア領主サポヤイ・ヤーノシュに統治を委ねた。1540年、サポヤイ・ヤーノシュが死去し、生後数ヶ月の彼の嫡子ヤーノシュ・ジグモンドが即位する。不安を感じたスレイマン1世は、西ハンガリー王国に接するブダを占領し、パンノニア平原を直領化した。

ハンガリーが三つに割れたが、東ハンガリー王国は独立を維持し、神聖ローマ帝国の威圧からも逃れる。そして1568年、成人したヤーノシュ・ジグモンドが「信仰の自由」を合法化する。おそらく、これが世界初の「信仰の自由」で、国法による慣習法の卑俗法化が可能にしたと筆者は考えるが、ヤーノシュの目的は三位一体を否定するキリスト教会＝ユニテリアン教会の創立であった。

アルメニア・キリスト教会やアリウス派キリスト教会も三位一体を否定している。だが、ユニテリアン教会は宗教改革運動期に誕生した「新派」のひとつで、発祥地はポーランドのクラクフである。

フィレンツェ生まれの神学者ファウスト・ソツツィーニが創立した「ポーランド兄弟団」が、ユニテリアン運動を推進した。ファウスト・ソツツィーニは、ポーランドのカルヴァン教会急進派を束ね、ポーランド兄弟団を創立したが、ルネサンス運動の影響を無視できない。

ポーランド兄弟団は、ユニテリアン運動を推進したが、「教会」を創立していない。最初にユニテリアン教会を創立したのは東ハンガリー王国である。宮廷侍医のジョルジョ・ビョンドラータがヤーノシュと宮廷牧師ダーヴィド・フィレンツに影響を与えたためである、と伝えられている(ソツツィーニとビョンドラータの間に何らかのつながりがあったのかもしれない)。ヤーノシュ自身もユニテリアンであった(ちなみに、ポーランドも1573年のワルシャワ連盟協約と同年制定したヘンリク条項＝憲法の下で「信仰の自由」を認めた)。

本文で述べたように、1568年にオスマン帝国と神聖ローマ帝国が8年間の平和条約を締結する。そして1570年、ヤーノシュ・ジグモンドは「ハンガリー王位」を放棄して神聖ローマ皇帝マクシミリアン2世のハンガリー王位を認め、トランシルヴァニア公に即位する。すなわち、東ハンガリー王国が「トランシルヴァニア公国」になる。ヤーノシュ・ジグモンドの死後、バートリ・イシュトヴァーン(ポーランド名ステファン・バートリ)がトランシルヴァニア公に即位したが、その後彼はポーランド・リトアニア王に即位する。ポーランド兄弟団がバートリ・イシュトヴァーン＝ステファン・バートリの即位を支援した。

ポーランド・リトアニア王ステファン・バートリは、後述するリヴォニア戦争(1558～1583年)でイヴァン4世率いるモスクワ大公国の大軍を撃退する。しかし彼の死後、ポーランド・リトアニア王に即位したジグムント3世がポーランド兄弟団の活動を禁止し、その後ヴワディスワフ4世がポーランド兄弟団を国外追放した(筆者の憶測であるが、「エホバの証人」はポーランド兄弟団の系譜である)。

それでもトランシルヴァニア公国にユニテリアン教会が残った。だが18世紀に神聖ローマ帝国がトランシルヴァニア公国を併合し、ユニテリアン教会は離散する。

アイザック・ニュートンがユニテリアンであったことや、ハーバード大学の教区がユニテリアン教会であることは有名であるが、現在のユニテリアン教会は多種多様で、カルト化している教団も存在する。

とはいえ、もっとも大きな問題は、コラム65で述べたように、ユダヤ教とイスラーム教に三位一体説が存在しない、ということである。すなわち、三位一体説を支持するキリスト教会にとって、ユダヤ教もイスラーム教も「広義のユニテリアン」である。

余談であるが、作家の佐藤優氏は、「ユニテリアン」と「ユニエイト」を混同しているように見える。ユニエイト＝合同教会(東方典礼カトリック教会)も三位一体説を護持している。そして、カトリック教会による東方正教会の支配を提唱しているが、現在のカトリック教会はユニエイトを異端視している。

コラム69: ヴェネツィア共和国の衰退と滅亡

キプロス島もクレタ島もヴェネツィア領で、キプロス島はワインの製造拠点、クレタ島は砂糖の製造拠点であった。オスマン帝国は、1571年にキプロス島を攻略し、1644年にクレタ島の攻略を開始する。クレタ島の攻防は1669年まで続き、ヴェネツィアは衰退した。18世紀のヴェネツィアは、海運も海軍も維持できない状態に陥る。そして1797年、ナポレオン・ボナパルトがヴェネツィアを征服する。

キプロス島とクレタ島を失ったヴェネツィアが衰退する約200年の歴史は、国政を担う政治家や政府官僚、企業経営者にとって「教訓」の宝庫であるが、それについて語ることは本書の主旨から大きく離れる。

9.4 ポルトガルとスペインの大航海時代

スペインは、カスティーリヤ王フアン2世の四女イサベルとアラゴン王フアン2世の次男フェルナンドが結婚した1469年に誕生した、とされている。しかしイサベルがカスティーリヤ女王に即位したのは1474年である。そしてフェルナンドがアラゴン王に即位したのは1479年である。イサベルの死後、フェルナンドがカスティーリヤの執政を担うが、カール5世の母フアナがカスティーリヤ女王に即位している。したがって、スペイン(エスパーニャ)はカール5世がスペイン王に即位した1516年に誕生したと言えるかもしれない。

カール5世がスペイン王に即位するまで、カスティーリヤはいわゆる内陸国家であった。アラゴンは海洋国家であったが、アラゴン船舶はもっぱら地中海を航行し、大西洋を航行する場面はなかった。カスティーリヤ女王イサベル1世の支援を得たクリストファー・コロンブスが大西洋を横断し、1492年にバハマ諸島のサン・サルバドル島に到達したことは有名であるが、当時の大西洋を航行していた船舶は概ねポルトガル船舶である。

すなわち、「大航海時代」を切り開いたのはポルトガルである。以下、ポルトガルが誕生するまでの経緯とポルトガル船舶が大西洋やインド洋を航行しはじめるまでの経緯、そしてスペイン船舶が太平洋を航行しはじめるまでの経緯を手短かに述べる。また、当時のポルトガルとスペインが世界経済に及ぼした影響等を論じる。

ポルトガルにも石器時代があり、数万年前の壁画＝ロックアート、環状列石＝ストーンサークルや支石墓＝ドルメンがある。そして古代ローマの遺跡もある。

5世紀初頭、西ゴート族が移動してイベリア半島を占領し、西ゴート王国を建国する。古代ローマ帝国が「ルシタニア」と呼んでいた地域(概ね現在のポルトガル共和国)も西ゴート王国の一部になった。5世紀末頃、初代メロヴィング朝フランク王クロヴィス1世がアタナシウス派キリスト教に改宗し、その後ヨーロッパ各地のゲルマン人たちが改宗する。西ゴート族も改宗した。

8世紀初頭、ウマイヤ朝アラブ軍が侵入して西ゴート王国を滅ぼし、イベリア半島を概ね支配する。とはいえ、ウマイヤ朝アラブ帝国はキリスト教を容認した。イベリア半島各地にキリスト教徒の共同体が残る。8世紀中頃、ウマイヤ朝アラブ帝国はアッバース朝イスラーム帝国に変遷するが、イベリア半島にウマイヤ朝＝後ウマイヤ朝が残った。後ウマイヤ朝は異教に寛容であった。そして8世紀後半頃からユダヤ教徒が入植しはじめる。

11世紀前半、後ウマイヤ朝は内紛で分裂する。イベリア半島各地で多数のムスリム諸侯が跋扈した。他方、キリスト教徒たちのレコンキスタ運動がはじまる。「広義の近代」の出現期の第1四半期(12世紀後半～13世紀後半)頃までに、キリスト教徒たちはグラナダとその周辺を除くイベリア半島を概ね支配し、各地に王国を建国する。ポルトガル王国もそのひとつである。

1142年、カスティーリヤがポルトガルの独立を認め、1179年、ローマ教皇アレクサンデル3世がアフォンソ・エンリケスのポルトガル王即位を認める。アフォンソ・エンリケス＝ポルトガル王アフォンソ1世の死後、ポルトガルはアフォンソ3世(在位1248～1279年)の代にレコンキスタ運動を終結して首都をリスボンに移し、統治体制を確立する。そしてアフォンソ3世の死後、ポルトガル王に即位した彼の嫡子ディニス1世(在位1279～1325年)が開墾を促進して農地を拡大し、農産物の生産量を増大させた。ポルトガルはオリーブ油やワイン、塩、イチジク、アーモンド等の輸出をはじめる。

ディニス1世は、農産物の輸出貿易をジェノヴァに委ねたが、他方、ジェノヴァから造船技術と航海技術を輸入して海軍を強化する。また、コインブラ大学を開校して学術も強化した。ディニス1世の代に農業が牧羊中心から農耕中心に変遷し、また造船技術と航海技術を輸入したことがその後のポルトガルとスペインのちがいをつくる。

ディニス1世以降、ポルトガルはスペインのように食料不足に悩む場面がない。またフランスを模倣してカトリック教会の権益を削減したため、ポルトガル王がスペイン王のように破産宣告する場面もない(ちなみに、カトリック教会の権益削減に邁進したアフォンソ3世は一度破門されている)。

コインブラ大学には、他のヨーロッパ諸国の大学同様、法学部が存在した。したがってポルトガルでも法治主義が広まる。他方、コインブラ大学には文法学部も存在した。筆者の認識では、世界初の「文学部」である。ディニス1世の代に、ポルトガルは公文書をラテン語からポルトガル語に変更するが、コインブラ大学の文法学部＝文学部が大きな役割をはたしたように思う。

(ポルトガル王ペドロ1世と女官イネスの恋愛物語に様々なバリエーションがある。イネスが善女になったり悪女になったりし、ペドロ1世が賢王であったり愚王であったりする。ペドロ1世の父アフォンソ4世の役割も様々である。国王と女官のよく似た関係は世界各地に多数あり、物語になる場合もあるが、ポルトガルほど大きく膨らむ例はない。おそらく、コインブラ大学の文法学部で学んだ学生たちが大きく膨らませた。ペドロ1世とイネスの恋愛物語は、「ポルトガル語」という新しい公用語の普及に必要なツールであった)

ディニス1世の死後、黒死病がポルトガルを襲い、その後内紛と内乱が続く(筆者は、他のヨーロッパ諸国同様、開墾による森林伐採が黒死病の遠因であったと考える)。その後アフォンソ3世の代にはじまった身分制議会(コルテス)に平民代表(中小貴族や商工業者の代表)が参加するようになる。すなわち、ポルトガルの身分制議会がフランスの三部会と同様な議会に変貌した。

1385年、中小貴族や商工業者の支持を得たジョアン1世(在位1385~1433年)が内戦を制圧して即位し、アルジュバロータの戦いでファン1世率いるカスティーリャ軍を破る。そして、7章で述べたが、ランカスター公ジョンの娘フィリパを娶る。イングランドとの同盟がその後のカスティーリャの侵攻を阻止した。

1390年、カスティーリャ王ファン1世が落馬事故で死去したため、カスティーリャとの緊張関係が緩む。1411年、ポルトガルはカスティーリャと平和条約を結び、その後ジョアン1世は国力回復に邁進する。とはいえ、ディニス1世のように農耕を促進したわけではない。ジョアン1世はジブラルタル海峡を越えてモロッコに侵攻し、モロッコの農地とアフリカ産の金を得ようとする。

1415年、約200隻のポルトガル艦船と約2万名のポルトガル兵がモロッコに上陸して港湾都市セウタを攻略した。不意を突かれたイスラム教徒に反撃する余裕はなかったが、その後結束してセウタを包囲する。ジョアン1世は、拠点のひとつを獲得したが、モロッコの農地もアフリカ産の金も得ることができなかった。とはいえ、セウタ攻略が大航海時代のはじまりになる(当時のアフリカでは、サハラ砂漠を横断するキャラバン隊がスーダン等で産出する金を運送していた。セウタは金の集積地であったが、ポルトガル軍が攻略した後、タンジールや他の北アフリカ港湾都市が金の集積地になる)。

1416年、ジョアン1世は三男エンリケをセウタ総督に任命する。エンリケは探検隊を組織して大西洋諸島を探索した。エンリケが派遣した探検隊は1416年にポルトガル南西のマデイラ諸島を再発見し、1427年にアゾレス諸島を再発見する。エンリケはマデイラ諸島とアゾレス諸島の植民を推進した。やがてマデイラ諸島は砂糖の生産地としてポルトガル経済を支え、アゾレス諸島は大西洋航路の重要な中継地になるが、エンリケはアフリカ大陸西岸の探検も推進する。

(マデイラ諸島は古代フェニキア人が、アゾレス諸島は古代カルタゴ人が発見していたようである。ちなみに、マデイラ諸島最大の島=マデイラ島の面積は奄美大島とほぼ同じで、アゾレス諸島の最大の島=サンミゲル島はマデイラ島より少し大きい)

1433年、ジョアン1世が死去し、エンリケの兄ドゥアルテがポルトガル王に即位するが、5年後の1438年に死去する。そしてドゥアルテの嫡男アフォンソが6歳でポルトガル王アフォンソ5世に即位する。

エンリケはもうひとりの兄ペドロとともにアフォンソ5世を支えた。他方、エンリケの支援を得た技術者集団が3本マストの新型帆船=キャラベル船を発明する。そして1444年、エンリケが派遣した探検隊が限界地点と言われていた西アフリカのボジャドール岬を越えてブランコ岬に到達し、さらにその先のヴェルデ岬に到達する。それにより、サハラ砂漠を迂回してアフリカ産の金の輸入が可能になる。

1452年、ポルトガルは金貨を鑄造して発行した。エンリケは1460年に死去するが、ポルトガルは1471年にギニア湾のミナ(現在のガーナ共和国エルミナ市。黄金海岸=コスタ・デ・オロと呼ぶ場合もある)で金の直接取引をはじめた。

エンリケの死後、ポルトガルはアフリカ西岸と大西洋諸島の探索を一時民営化したが、これには理由がある。ポルトガルはジョアン1世が死去した後もモロッコ遠征を継続していた。しかし1437年、フェズ王国(モロッコの一地域を支配していたムスリム王朝)がエンリケの弟フェルナンドを捕縛し、彼の身柄と引き換えにセウタ返還を要求する。ポルトガルはモロッコ遠征を中断したが、1443年にフェルナンドが獄死したため、モロッコ遠征を再開する。ポルトガルはセウタを含む四つの港湾都市を攻略し、フェズ王国からフェルナンドの遺体を奪還するが、事業を継続する余力を失う。

エンリケが死去した1460年から1474年まで、リスボン商人のフェルナン・ゴメスがエンリケの事業を継続した。彼は約14年間の金取引で莫大な利益を得る。

成人したアフォンソ5世は野心家で、カスティーリャの併合を目指す。1476年のトロの戦いで大敗する。その後彼の嫡男ジョアンがポルトガル王ジョアン2世(在位1481~1495年)に即位して中央集権体制を強化する。ジョアン2世の死後、ポルトガル王に即位したマヌエル1世(在位1495~1521年)は「マヌエル法典」を編纂し、絶対君主として君臨した。マヌエル1世の執政を注視する歴史家たちは、ヨーロッパで最初に誕生した絶対主義国家はポルトガルである、と論じている。

マヌエル1世の死後、彼の嫡男ジョアンがポルトガル王ジョアン3世(在位1521~1557年)に即位する。ジョアン3世は約36年在位した。マヌエル1世とジョアン3世の代がアヴィス朝ポルトガルの黄金期である。

とはいえ、ジョアン3世は大きな間違いをひとつした。宗教改革運動の勃発を阻止するためであったと思うが、彼は異端審問所を設立してマヌエル1世の代に改宗したユダヤ教徒=新キリスト教徒(マラーノ。スペインでは「コンベルソ」と呼んでいた)を弾圧する。新キリスト教徒の多くがアントウェルペンに亡命し、その後アムステルダムに移動してオランダの交易拡大に尽力した。すなわち、ジョアン3世はオランダが台頭する原因をつくってしまった。そして後のオランダがポルトガルを苦しめる。

ジョアン3世の死後、彼の孫セバスティアンが3歳でポルトガル王セバスティアン1世に即位する。祖母のカタリナ(ジョアン3世の王妃。神聖ローマ皇帝カール5世の妹)が摂政を担っている間、ポルトガルの政情は安定していた。しかし成人して親政をはじめたセバスティアン1世はモロッコ遠征を強行する(アフリカ産の金やインド産の胡椒を直接取引していた当時のポルトガル商人たちは、モロッコは不要であると考えていたが、セバスティアン1世は宗教的理由でモロッコ遠征を強行する。すなわち、「十字軍」遠征を行った)。だが1578年のアルカセル・キビール(Alcácer Disibod)の戦いで惨敗し、戦死する。その後ジョアン3世の弟エンリケがポルトガル王エンリケ1世に即位するが、1580年に死去し、スペイン王フェリペ2世がポルトガルを併合する(コラム70)。

(ジョアン2世はミナに商館を建設した。ミナの商館は毎年800キログラムの純金をリスボンに送り、ポルトガルはヨーロッパ最大の富豪国になる。したがって当初、クリストファー・コロンブスは西回りでインドに到達する航路の探索をジョアン2世に提案した。しかしジョアン2世は東回りでインドに到達する航路の探索をはじめていた。他方、アフォンソ5世が成しえなかったカスティーリャの併合も目指していた。とはいえ、

アラゴンと合併して巨大化した当時のカスティーリヤ、すなわち「スペイン」の武力併合は容易でない。そこでジョアン2世は、自身の嫡男アフォンソ、イサベル1世とフェルナンド2世の間に生まれた長女イサベルの結婚を仕組む。結婚は成立し、夫婦仲もよかったため、富豪国ポルトガルがスペインを併合したかに見えた。だが、結婚した翌年、アフォンソは落馬事故で死去する。ジョアン2世には他に嫡子がいなかった。ジョアン2世の死後、王后レオノールの弟マヌエルがポルトガル王マヌエル1世に即位する。上で述べたように、マヌエル1世は絶対君主として君臨するが、インドに到達する航路の探索も精力的に行った。1488年、バルトロメウ・ディアスがアフリカ大陸南端の喜望峰に到達し、1498年にヴァスコ・ダ・ガマがインドのカリカットに到達する(ヴァスコ・ダ・ガマの「砲艦外交」は割愛する)。その後ペドロ・アルヴァレス・カブラルが「ブラジル」を発見し、大西洋の縦断が容易になる。そしてコラム60で述べたように、ポルトガル海軍がオスマン海軍をペルシャ湾内に封じ込め、ゴアに商館を設置してインド産胡椒の直接取引をはじめめる。さらにマラッカに進出してインドネシア産の香料(モルッカ諸島のクローブやバンダ諸島のナツメグ)を寡占し、マカオに進出して中国＝明との交易もはじめる。マヌエル1世の代に、ポルトガルは世界初の「海上帝国」になる。尚、マヌエル1世の長女が神聖ローマ皇帝カール5世の後イサベルである。彼女が持参した100万ドゥカート(金貨)がカール5世の財政難を一時救済し、彼女とカール5世の間に生まれたフェリペがスペイン王フェリペ2世に即位する。ジョアン3世の黄金期を経た後、ポルトガルは一時衰退するが、1580年にポルトガルを併合したフェリペ2世はポルトガルの王位継承権を有していた)

南大西洋は、南米大陸側の風向きが北から南、アフリカ大陸側の風向きが南から北になる。したがって、リスボンからゴアに向かう船舶は、アフリカ大陸西岸を南下するより北大西洋を斜めに横断してブラジルに寄港し、その後南大西洋を斜めに横断して喜望峰を回り、アフリカ大陸東岸のモザンビーク等に寄港してインドに向かうほうが合理的である(逆にゴアからリスボンに向かう船舶は、喜望峰からアフリカ大陸西岸を北上するほうが合理的である)。

1494年、ポルトガルはスペインとトルデシヤス条約を結び、ブラジルを確保する。ブラジルを除く南米がすべてスペイン領になるが、当時のポルトガルにとって、喜望峰に向かう船舶の寄港地を確保するほうが重要であった。

とはいえ、神聖ローマ皇帝カール5世に敵対していたフランス王フランソワ1世はトルデシヤス条約など認めない。フランソワ1世の下で、フランス海軍がカリブ海と中南米に進出はじめる。危機を感じたポルトガル王ジョアン3世は入植を推進する。ジョアン3世は、ブラジルを分断し、家臣に分配した。だが、ブラジルには多数の先住民が在住している。入植者と先住民の抗争は必定で、国家の武力介入がなければ入植は容易にやれない。ジョアン3世の封建的入植政策は頓挫する。

1548年、ジョアン3世はトメ・デ・ソーサに総督(国王代理人)の地位を与え、入植を国営化する。熱心なカトリック信徒であったジョアン3世は、布教を重視するローマ教皇庁とイエズス会の方針に従い、改宗した先住民の奴隷労働を禁じた。他方、アフリカで「購入」した奴隷をブラジルに「輸送」する。1570年、ジョアン3世の後を継いで即位したセバ스티アン1世が先住民奴隷禁止令を発令し、その後アフリカ人奴隷の「輸送」が急増する。

ブラジルに輸送されたアフリカ人奴隷の主な仕事はサトウキビの栽培と砂糖の製造である。ポルトガル船舶の寄港地にすぎなかったブラジルが、ポルトガル産業の中枢になり、その後フェリペ4世の代にスペインからの独立を支援する。他方、アフリカ大陸のベニン湾沿岸に「奴隷海岸」と呼ぶ地域ができる(その後「象牙海岸」や「胡椒海岸」と呼ぶ地域もできる)。

ところで、クリストファー・コロンブスは、大西洋を四度横断し、カリブ海のキューバ島やイスパニョーラ島(現在のハイチ共和国とドミニカ共和国)、中米のホンジュラスや南米のベネズエラを発見した。コロンブスはその地を「インド」であると信じていたようだが、黄金も胡椒も得ることができなかった。

とはいえ、ポルトガルとちがい、スペインは最初からカリブ海諸島や中南米への入植を国営事業化する。スペインの入植者たちは、キューバ島とイスパニョーラ島でサトウキビの栽培と砂糖の製造をはじめた。彼らは、先住民に奴隷労働を強いる(ちなみに、イサベル1世とフェルナンド2世は先住民の奴隷労働を禁じていない。それどころか、先住民奴隷を容認するエンコミエンダ制を制定した)。

1511年、ディエゴ・ヴェラスケスがキューバ総督に就任し、ユカタン半島に探検隊を派遣する。探検隊はマヤ文明と遭遇するが、目的は「太平洋」の発見である。ヴェラスケスが派遣した探検隊は太平洋を発見できなかったが、1513年にパナマ地峡を横断したヴァスコ・バルボアが太平洋を発見する。そして1519年、ヴェラスケスの秘書官エルナン・コルテスが編成した探検隊がアステカ帝国の首都テノチティラン(現在のメキシコシティ)を発見する。

経緯は割愛するが、コルテスは1521年にテノチティランを包囲して攻略し、最後のアステカ王クアウテモックを拷問にかけて黄金の在り処を探し出す。その後コルテスはエンコミエンダ制をメキシコ全土に拡大した。また、コルテスの副官アルバラードが現在のグアテマラとエルサルバドルを征服し、オリードが現在のホンジュラスやニカラグアを征服する。

他方、ポルトガル宮廷を去ったフェルディナンド・マゼランがカール5世の許可とフッガー商会の代理人アロの支援を得て艦隊を編成し、1519年にスペインの港湾都市セビリア(セヴィーリア)を出港する。苦難の末、マゼラン艦隊は南米大陸南端を越えて太平洋に到達し、フィリピン諸島に到着した。

マゼランは、トルデシヤス条約に反することなく西回りの香料貿易が可能であるとカール5世を説得していた。遠征の目的も西回りでインドネシアのモルッカ諸島やバンダ諸島に到達し、ポルトガルが独占していた香料貿易に参入することであった。

しかし、過去にポルトガル海軍のマラッカ遠征に従軍したマゼランは、フィリピン諸島からモルッカ諸島への渡航は容易であると考え、フィリピン諸島でキリスト教の布教にしばらく熱中する。そしてマクタン島(セブ島に隣接する小島)の王ラプ・ラプと戦い戦死する。マゼランの死後、残された船員たちがモルッカ諸島に向かい、大量の香料＝クローブを積んでセビリアに帰港した。1522年の帰港であった。

(南米大陸南端は天候が不安定で、帆船による踏破は危険が大きい。それを体験したマゼランは、フィリピン諸島にスペインの拠点をつくる必要があると考え、キリスト教の布教に熱中したのかもしれない。だが、当時の東南アジア各地にイスラーム教に改宗した支配者が多数いた。マクタン島の王ラブ・ラブもイスラーム教徒である。ラブ・ラブはキリスト教の布教を認めなかった。本書では、東南アジアでイスラーム教が流布する経緯を論じなかったが、ポルトガルやスペインが「侵略」する前にイスラーム教が太平洋を超えて中南米にも届いていれば、中南米の悲惨な歴史はなかったかもしれない。ちなみに、当時のポルトガルは1508年にアフリカ東岸のモザンビーク、1510年にインド西岸のゴア、そして1511年にマレー半島先端のマラッカに拠点を築いていた。ポルトガルは暴力的に各拠点を獲得し、マラッカ獲得後、インド産の胡椒に加えてモルッカ諸島やバンダ諸島の香料をヨーロッパに輸送して多大な利益を得る。羽田正氏の著書「東インド会社とアジアの海(講談社学術文庫)」によれば、当時の香料は医薬品である)

マゼラン艦隊は西回りで地球を一周した。その後スペインは艦隊の遠征を繰り返すが、南米大陸南端＝マゼラン海峡の踏破に苦慮する。しかしメキシコを征服したエルナン・コルテスが太平洋側に港湾都市アカプルコを建設し、1531年に道路を建設してメキシコシティとアカプルコを結ぶ。それにより東回りのメキシコ渡航が可能になる。

太平洋を横断したスペイン船舶が、アジア産の胡椒や香料をアカプルコに輸送し、その後陸路で大西洋側の港湾都市ベラクルスに送り、海路でセビリアに輸送しはじめた。メキシコのサカテカスやグアナフアトの銀山で採掘した銀もベラクルスに搬送してセビリアに輸送する。

他方、フランシスコ・ピサロが1533年にインカ帝国を滅ぼし、1535年に現在のペルー共和国の首都リマを建設する(ピサロの悪事は割愛する。彼は1541年に暗殺された)。そして1545年、現在のボリビア多民族国ポトシ市で巨大銀山＝セロ・リコ銀山が見つかる。

当初、セロ・リコ銀山で採掘した銀はリマ市近郊のカヤオから海路でパナマに搬送し、パナマ地峡を経て大西洋側のコロンからセビリアに輸送していた。だが1571年にミゲル・ロペス・デ・レガスピが現在のフィリピン共和国の首都マニラを占領して拠点化し、1572年に中国＝明が一条鞭法を施行した後、カヤオからマニラに輸送するようになる。そして、マニラで中国産の絹や陶磁器、金と交換し、セビリアに輸送する。穀物を国外に依存していたスペインは、そうしなければ食料を確保できない状況に陥っていた。

(ちなみに、スペイン船舶がマニラから中国に向かう場面はない。1573年にポルトガルがマカオに拠点を築いている。マニラ・中国間の貿易はもっぱら中国のジャンク船やポルトガル船舶が担った。また、スペインは1580年にポルトガルを併合している。スペイン船舶がマニラからインド洋と大西洋を経由してヨーロッパに向かう必要がなくなる。太平洋上のスペインの船舶はもっぱらマニラとアカプルコ間を航行した)

数字で当時の状況を考察する。以下の表(表3)は当時のセビリアで陸揚げした物資の総額である(瀬原義生氏が著書「皇帝カール5世とその時代(文理閣)」に記載された資料を参照して作成した。ちなみに、当時のスペインは交易港をセビリアに一元している)。

| | 輸入額 | 輸入額の増減 |
|------------|----------|------------------|
| 1541～1560年 | 約566万ペソ | — |
| 1561～1580年 | 約1089万ペソ | 1541～1560年の約192% |
| 1581～1600年 | 約2456万ペソ | 1561～1580年の約226% |

フェリペ2世がスペイン王に即位してからポルトガルを併合するまでの間、輸入額が倍増している。さらにポルトガルを併合した後も輸入額が倍増している。以下の表(表4)は中南米の銀産出量である。

| | 中南米の銀産出量 | 産出量の増減 |
|------------|----------|------------------|
| 1541～1560年 | 約135.4トン | — |
| 1561～1580年 | 約248.0トン | 1541～1560年の約183% |
| 1581～1600年 | 約374.6トン | 1561～1580年の約151% |

当時のスペイン経済は中南米で産出する銀に依存していた。しかし表3と表4から察するに、大幅な貿易赤字に陥っていた。

だが、中国＝明が1572年に一条鞭法を施行した後、中国で金の価格がヨーロッパの半値以下になる。すなわち、中国商船やポルトガル商船が寄港するマニラで、ヨーロッパよりはるかに有利な条件で銀と金を交換できるようになる。金銀交換の下で為替差益を得る「経済」が重金主義経済であるが、そのような重金主義政策の下でスペインはかろうじて極度の貿易赤字と財政赤字を回避していた。しかし日本が産出する銀がスペインの重金主義政策を打破する(次章で一条鞭法と日本銀について論じる)。

(1568年にオランダ独立戦争が勃発し、1571年にレパント海戦が勃発した。本書では言及しないが、1572年にフランスでサン・バルテルミの虐殺(聖バーソロミューの虐殺)も勃発している。しかし1570年にポルトガル王セバスティアン1世が先住民奴隷禁止令を発令し、その後のブラジルでアフリカ人奴隷が急増したことが大きい。アフリカ人奴隷の急増が奴隷を「財産」から「商品」に移行する。筆者の認識では、それが近代奴隷制のはじまりであるが、アフリカ人奴隷たちはキリスト教に改宗しても奴隷労働から解放されない(近代と中世のちがいはまさにその点あるとさえ言える)。やがて先住民奴隷禁止令も形骸化するが、中国＝明が一条鞭法を施行したことも大きい。中国の一条鞭法＝銀本位制がヨーロッパの銀本位制を強固にし、重金主義と重商主義を促進した。1570年頃から、「広義の近代」が突破期に突入する)

尚、イマニュエル・ウォーラーステインは、中南米で産出する銀の流入がヨーロッパで「価格革命」を引き起こしたと論じている。彼は、それを資本主義経済の起点にしてもいる。「価格革命」や資本主義経済をどう定義するかにもよるが、筆者の考えでは、ウォーラーステインの言説は上げすぎ。それについて少し論じたい。以下の表(表5)は16世紀後半のヨーロッパの銀産出量である。

| 表5 | | |
|------------|------------|-----------------|
| | ヨーロッパの銀産出量 | 産出量の増減 |
| 1541～1560年 | 約62.4トン | — |
| 1561～1580年 | 約48.5トン | 1541～1560年の約78% |
| 1581～1600年 | 約41.3トン | 1561～1580年の約85% |

16世紀後半、ヨーロッパの銀産出量は減少している。しかし大きく減少しているわけではない。以下の表(表6)は同時代の中南米の銀産出量とヨーロッパの銀産出量の合算である。10年間で40～50パーセント程度増大している。

| 表6 | | |
|------------|----------------|------------------|
| | 中南米とヨーロッパの銀産出量 | 産出量の増減 |
| 1541～1560年 | 約197.8トン | — |
| 1561～1580年 | 約296.5トン | 1541～1560年の約150% |
| 1581～1600年 | 約415.9トン | 1561～1580年の約140% |

10年間で40～50パーセント程度しか増大しなかった銀産出量を資本主義経済の起点にするのは無理がある。

1551年にカール5世がアウグスブルク通貨法を制定し、本位貨幣制と銀本位制がはじまった。そして中南米で産出する銀が銀本位制を強固にした。「価格革命」はそのように考えるほうが妥当で、中南米で産出する銀がなくてもヨーロッパ経済は金銀複本位制から銀本位制に変遷したと筆者は考える。

本位貨幣制＝銀本位制下で貨幣経済＝順序構造と商品経済＝位相構造に代数構造が重畳し、重商主義と市場経済が誕生した。とはいえ、市場経済＝代数構造が露呈するのは「広義の近代」の突破期である。そして、資本の「運動」が三つの数学的構造を束ねる資本主義経済がはじまるのは第一次産業革命以降である。すなわち、18世紀後半以降である。

(銀本位制を金銀複本位制と同様に考える歴史家や経済学者が意外に多い。しかし銀本位制のはじまりは交換手段と決済手段を一元する「本位貨幣」のはじまりである。歴史家や経済学者が、銀の産出量や流通に着目し、本位貨幣の具現に着目しないのは「怠慢である」、と言うしかない)

コラム70: キリスト騎士団とエンリケ航海王子

ポルトガル王アフォンソ3世はカトリック教会の権益を抑制し、ディニス1世は農耕と造船業を育成した。またフランス王フィリップ4世がテンプル騎士団を潰した場面で新たな騎士団＝キリスト騎士団を創立し、テンプル騎士団がポルトガルに残した「財」をローマ教皇庁から譲り受けている。そして、ジョアン1世の三男エンリケ(エンリケ航海王子)がキリスト騎士団の団長に就任している。エンリケはキリスト騎士団の「財」を投じて探検隊を組織し、派遣した。

日本の社会学者や経済学者たちは、スペインの歴史をしばしば語るが、ポルトガルの歴史をあまり語らない。ポルトガルの歴史を少し勉強してほしい、と思う。100年以上の歴史的蓄積がある時代の繁栄を築く場合がある。アヴィス朝ポルトガルの黄金期はその典型かもしれない(フランシスコ・ザビエルをアジアに派遣したのはポルトガル王ジョアン3世である)。

9.5 カルマル同盟の崩壊とシュラフタ民主制の誕生

コラム38で述べたが、デンマークとスウェーデン、ノルウェーは1397年にカルマル同盟を結成し、デンマーク王ヴァルデマー4世の末娘マルグレーテが三国を束ねる。そして1412年にマルグレーテが死去し、その後デンマーク王エーリク7世(在位1396~1439年)が三国を束ねる。すでに述べたが、エーリク7世はエーレスンド海峡(北海とバルト海をつなぐデンマーク・ノルウェー間の海峡)を通過する船舶から通行税を徴税した。

当然、ハンザ同盟が怒り、貿易で利益を得ていたスウェーデンとノルウェーの貴族や農民の反乱が勃発する。しかしエーリク7世は通行税を撤廃しない。他方、スウェーデンとノルウェーにも通行税を分配し、貴族や農民たちを懐柔する。そして反乱の沈静を確認しながら退位した。

エーリク7世退位後、クリストファ・バイエルンがデンマーク王クリストファ3世(在位1440~1448年)に即位し、彼の死後、遠縁のオルデンプルク伯クリスチャン7世がデンマーク王クリスチャン1世(在位1448~1481年)に即位する。だが、クリスチャン1世が即位する前にスウェーデンの貴族や聖職者たちが宰相カール・クヌートソンを選出していた。そのため、三国の争乱が勃発する。

カール・クヌートソンは退位と即位を繰り返し、1470年に死去するが、三国の争乱は彼の死後も続いた。しかしクリスチャン1世の死後、彼の長男ハンス(在位1481~1513年)がデンマーク王に即位し、カルマル同盟が一時蘇生する。

(エーリク7世は、エーレスンド海峡の通行税を制定して陸の支配体制を海に拡大した。筆者の認識では、デンマークとポルトガルが最初の「海上帝国」である。しかし歴史家や社会学者たちは、オランダやスペインを語る場でもっぱら「海洋国家」や「海上帝国」という言葉を使う。そして政治学者や経済学者たちは、陸の支配体制が海に拡大する場面を考察することなく海軍や海運、海上交易等を根拠に「海洋国家」や「海上帝国」を語る場合が多い。歴史家や社会学者、政治学者や経済学者たちはかなり恣意的に「海洋国家」や「海上帝国」という言葉が使っている。誤解が生じる可能性があるため、本書では「海洋国家」や「海上帝国」という言葉をなるべく使わないようにする)

だがハンスの死後、彼の嫡子がデンマーク王クリスチャン2世(在位1513~1523年)に即位し、その後スウェーデン王に即位する場面で反発するスウェーデン貴族や聖職者たちを呼び集め殺害した。この殺害=ストックホルムの血浴事件がスウェーデン独立戦争の発端になるが、クリスチャン2世はデンマークでも王権を強化して貴族や聖職者たちと対立する。

1523年、クリスチャン2世の叔父が粗暴な彼を追放してデンマーク王フレゼリク1世(在位1523~1533年)に即位する。そして同年、「血浴事件」で父を殺害されたヴァーサ家の長男グスタフ・ヴァーサがスウェーデン王グスタフ1世(在位1523~1560年)に即位する。

グスタフ1世は、スウェーデン独立戦争を継続した。そして、民衆から多大な戦費を調達する。そのため農民の反乱が勃発した。グスタフ1世は、反乱を鎮圧し、その後農民を赦免する。他方、反乱に加担した聖職者を処刑し、国内のカトリック教会領をすべて王領化する。グスタフ1世の代に、スウェーデンの国教がルター派プロテスタントになり、国土の約4分の1が王領になる。

デンマークでも1533年にフレゼリク1世が死去し、彼の長男がデンマーク王クリスチャン3世(在位1534~1559年)に即位してルター派プロテスタントの国教化を推進する。そしてカトリック教会領を没収し、国土の約四割を王領化する。

クリスチャン3世の政策に貴族や聖職者たちが反発した。彼らはハンザ同盟の支援も得る。そして伯爵戦争(グラーク戦争)が勃発したが、クリスチャン3世は彼らを撃退する。その後スウェーデンと50年の休戦条約(シュパイアー条約)を結ぶ。

グスタフ1世とクリスチャン3世の代に、スウェーデンとデンマークは国力を回復した。その後1559年にクリスチャン3世が死去し、翌1560年にグスタフ1世が死去する。デンマークではクリスチャン3世の長男フレゼリク=フレゼリク2世が王位を継承し、スウェーデンではグスタフ1世の長男エリク=エリク14世が王位を継承した。

(その後のデンマークとスウェーデンは次章で論じるが、エーリク7世が制定したエーレスンド海峡の通行税はハンザ同盟の特権を無効化した。そして、クリスチャン3世の代から、オランダ商船がバルト海貿易に参入しはじめる。デンマークは対岸のノルウェーに通行税を分配した。したがってノルウェーの反乱は小規模で、ノルウェーが独立する場面はなかった。歴史家たちは、カルマル同盟はスウェーデンが独立した場面で崩壊したと論じている。筆者に異論はないが、デンマークではスウェーデンがノルウェーを併合する1814年まで存続したことになる。ちなみに、当時のフィンランドはスウェーデン領である。16世紀前半に、ひとつであったスカンジナビア半島の勢力がふたつに分裂した。スカンジナビア半島で主権国家が現在の「スカンジナビア三国」を形成するのはかなり後の時代である)

同時代のポーランド・リトアニアはカジミェシュ4世(在位1447~1492年)が同君連合の基礎を固めた(コラム58で述べたが、カジミェシュ4世はタンネンベルクの戦い=グルンヴァルトの戦いで大勝したヨガイラ=ヴワディスワフ2世の実子である)。そして1471年、カジミェシュ4世の長男がハンガリー王ウラースロー2世に即位し、カジミェシュ4世の死後、彼の三男と四男、五男がポーランド・リトアニア王位を順次継承する。五男ジグムント1世(在位1506~1548年)の代と彼の長男ジグムント2世(在位1548~1572

年)の代が農業国ポーランド・リトアニアの最盛期である。

後述するリヴォニア戦争以前のポーランド・リトアニアは、モスクワ大公国と対立する場面があってもデンマーク・ノルウェーやスウェーデン・フィンランドと対立する場面はなかった。また、ジグムント1世もジグムント2世も熱心なカトリック信徒ではなかったが、グスタフ1世やクリスチャン3世のようにルター派プロテスタントに改宗してカトリック教会領を王領化する場面はなかった。

(ルター派プロテスタントに改宗してカトリック教会領を王領化したくても、できなかった、と言うほうが正しいかもしれない。なぜなら、当時のポーランド・リトアニアには、カトリック教会とプロテスタント教会だけでなく、東方正教会も並存していたからである。キリスト教会三派が鼎立している状況下では、ひとつの宗派を国教化して他宗派の領地等を没収することは困難である)

デンマークやスウェーデンとちがい、ポーランド・リトアニアの王権は脆弱であった。ジグムント1世もジグムント2世も王権の脆弱さに苦労した。

他方、貴族の力が増大し、大貴族＝マグナートだけでなく中小貴族＝シュラフタの力も増大する。そして穀物輸出による好景気と中小貴族＝シュラフタの力が増大する状況下で、民主制＝シュラフタ民主制が誕生する(コラム71)。

(より重要なことは、大貴族や中小貴族の信仰が多様で、多様な人種が彼らの下に集まったことである。すなわち、宗教改革期に、ポーランド・リトアニアがヨーロッパの巨大な避難所＝アジールになる。時代は少し下るが、ブランデンブルク・プロイセンもアジール化している。多くのプロテスタント信徒がルイ14世治世下のフランスからブランデンブルク・プロイセンに避難した。当時のベルリンの人口の約3分の1がフランス人である)

コラム71: シュラフタ民主制下のポーランド・リトアニア

歴史家や社会学者たちが、シュラフタ民主制下でポーランド・リトアニアが弱体化したと論じる場合がある。しかしヴワディスワフ4世の代まで、シュラフタ民主制は十分機能し、ポーランド・リトアニアはヨーロッパの大国であり続けた。

後述するリヴォニア戦争後、ポーランド・リトアニアはスウェーデン・フィンランドと戦火を交えるようになるが、筆者の見るところ、1648年にフメリニツキーの乱が勃発するまで、王権の脆弱さがポーランド・リトアニアを苦境に陥れる場面はない。

三十年戦争で活躍したグスタフ2世アドルフは、ポーランドの名将スタニスワフ・コニェツポルスキにほとんど勝てなかった。シュラフタ民主制下のポーランド・リトアニア軍のほうが、王制下のスウェーデン・フィンランド軍より強かったと言える。

次章で、シュラフタ民主制を掘り下げて論じるが、高校の世界史の授業では、ブランデンブルク・プロイセン＝ホーエンツォレルン朝ドイツ帝国のユンカーだけを「農場領主(グーツヘルシャフト)」と呼び、再版農奴制等も教えているようである。しかし、16世紀ヨーロッパの農場領主の大多数がポーランド・リトアニアの大貴族や中小貴族、およびモスクワ大公国の貴族である。ブランデンブルク・プロイセンの農場領主がユンカーに進展したのは事実だが、ポーランド・リトアニアやモスクワ大公国の農場領主を無視してはならない。

スペインやオランダへの穀物輸出が彼らの所得を増大した。その後穀物輸出量が減少した場面で中小貴族が没落し、シュラフタ民主制が悪しき「ポピュリズム」に変貌する。そして歴史家たちが「再版農奴制」と呼ぶ新たな農奴制がポーランド・リトアニアとモスクワ大公国ではじまる。

9.6 イヴァン4世下のモスクワ大公国

西ヨーロッパの重金主義と重商主義は、東ヨーロッパと北ヨーロッパ、ロシアにも影響を及ぼした。そして、バルト海と北海を結ぶエーレスンド海峡の支配、およびバルト海沿岸交易拠点の支配をめぐる争いが生じた。15世紀後半～16世紀後半のロシア＝モスクワ大公国は、バルト海沿岸交易拠点の争奪に関与する(あるいは争奪の中心になる)。

1471年、ノヴゴロドがポーランド・リトアニアと同盟を結ぶ。怒ったモスクワ大公イヴァン3世(在位1462～1505年)が大軍を送り、当時のノヴゴロド政権を打倒する。だが、政権を打倒されてもノヴゴロドの貴族と民衆はモスクワ大公の宗主権を認めない。1477年、イヴァン3世は再度大軍を送り、ノヴゴロドを併合した(以後、ノヴゴロドの貴族や民衆が市長を選出する場面がなくなり、民主共和制が消滅する)。

コラム45でも述べたように、イヴァン3世はノヴゴロドだけでなく他の周辺公国(トヴェリ、リャザン、ロストフ、プスコフ等)も併合してモスクワ大公国の版図を拡大した。そして旧キプチャク・ハン国への献納＝納税を拒否する。

1480年、旧キプチャク・ハン国＝カザン・ハン国の大軍がモスクワ大公国に進軍した。しかし引き返す。その後イヴァン3世は矛先を西方に向け、リトアニアの一部(現在のベラルーシ共和国)を併呑する。

(すでに述べたが、15世紀前半から歩兵が小銃を使いはじめ、騎兵の優位性が喪失している。カザン・ハン国軍が引き返したのは、イヴァン3世がウグラ川河畔に配置した大軍に怯えたためである、と言われているが、筆者は歩兵が発砲する小銃の音に馬が怯えて引き返したように思う。1470年に献納＝納税を拒否した後、イヴァン3世はカザン・ハン国に三度遠征を行った。遠征軍は歩兵が中心で、小銃を所持していた。カザン・ハン国の騎兵たちは小銃を恐れた)

1472年、イヴァン3世はビザンツ皇女ソフィヤ(ギリシャ名ゾエ)と再婚する。その後イタリアから建築家を招き、クレムリンの聖堂建設に着手した。1479年にウスペンスキー大聖堂＝生神就寝大聖堂が完成し、モスクワは名実共に東方正教会の中心地になる。

とはいえ、モスクワ大公国は版図内に多数のイスラーム教徒やユダヤ教徒が居住している。イヴァン3世の頃のモスクワ大公国は、キプチャク・ハン国同様、異教や異端に寛容であった。しかしイヴァン3世の死後、後を継いだヴァシーリー3世(在位1505～1533年)の代に寛容さを失う(コラム72)。

ヴァシーリー3世はモスクワ大公国の帝国化＝ビザンツ帝国化を推進した。ヴァシーリー3世の治世下で、地方行政が直轄統治に移行し、東方正教会＝ロシア正教会が強固になる。そしてモスクワ大公国の版図が六倍以上拡大する。

(ヴァシーリー3世は歴代ビザンツ皇帝を模倣して妃を公募した。ちなみに、国家と教会は対等であると論じる「ビザンツ・ハーモニー」は幻想にすぎない。ビザンツ帝国同様、モスクワ府主教はモスクワ大公の家臣である。また、15世紀後半～16世紀後半の国教は慣習法を束ねる役割を喪失し、国教会は統治機構としての役割だけでなく、自給性や自営性も喪失している)

ヴァシーリー3世の死後、イヴァン4世(在位1533～1584年)が三歳で即位する。イヴァン4世の母エレナが執政を担うが、彼女は1538年に死去する。とはいえ、彼女は約5年の摂政期間中に重大な改革を行った。貨幣の一元である。

むろんヴァシーリー3世も各公国の貨幣を統合して貨幣一元を目指していたし、かなりのレベルで具現していたように思う。だがエレナは、おそらく1524年に神聖ローマ皇帝カール5世が公布したエリスゲン通貨法を模倣して本位貨幣制＝銀本位制を導入し、貨幣を「ルーブル」に一元した(ドル＝ターラーは1551年のアウグスブルク通貨法の下で誕生したと考えられるので、ルーブルはドルより少し先に誕生したと言える)。

エレナの死後、貴族間の権力争いがはじまるが、ヴァシーリー3世の代に構築したビザンツ型スキームは崩れなかった。すなわち、ロシア正教会が「ツァーリ(君主あるいは皇帝)」に臣従し、幼少のイヴァン4世を支える。

1547年、成人したイヴァン4世がウスペンスキー大聖堂で戴冠し、親政をはじめめる。そして1549年、選抜会議(フランスの三部会に相当する身分制議会。全国会議であった)を開催する。選抜会議の下で法典が編纂され、法の下で財政や治安を担う官僚機構(後に「ブリカーズ」と呼ばれた)と常備軍＝銃兵団の編成が行われた。同時に、ヴァシーリー3世が実施した地方行政改革が進展する。

1552年、中央集権体制を確立したイヴァン4世率いる大軍が侵攻してカザン・ハン国を併合する。その後1556年にアストラハン・ハン国も併合する。それによりヴォルガ川全流域がモスクワ大公国の版図になる。

(カザン・ハン国とアストラハン・ハン国は消滅したが、クリミア・ハン国は残った。そして巨大化したモスクワ大公国に立ち向かう。ちなみに、クリミア・ハン国は1475年にオスマン帝国に服属している。オスマン帝国の下で国力を強化したクリミア・ハン国は1502年にサライを攻略し、版図をクリミア半島と黒海北岸、アゾフ海沿岸に拡大する。すなわち、モスクワ大公国がカザン・ハン国とアストラハン・ハン国を併合する前に、キプチャク・ハン国の後継国がクリミア・ハン国に移動していた)

1558年、「リヴォニア戦争(1558~1583年)」が勃発した。イヴァン4世率いる大軍がバルト海沿岸に侵攻し、ドイツ騎士修道会の分団=リヴォニア騎士団が所有するナルヴァ(現在のエストニア共和国第3の都市)を占領する。だが、クリミア・ハン国がアストラハンの奪還を目指していた。イヴァン4世はリヴォニア騎士団と半年間の休戦協定を結び、一旦引き返す。

当時のリヴォニア(概ね現在のエストニア共和国とラトビア共和国)はスウェーデン領ではないし、ポーランド・リトアニア領でもない。当時のリヴォニア地方はリヴォニア騎士団の領地である。したがって、イヴァン4世の戦争目的はスウェーデンやポーランド・リトアニアとの戦争を回避しながらバルト海沿岸の交易拠点を獲得することであったと思う。だが、休戦期間中にスウェーデンとポーランド・リトアニアが反モスクワ大公国同盟を結ぶ。

1561年、スウェーデン王エリク14世率いるスウェーデン軍がリヴォニアに侵攻する。翌1562年、エリク14世はフィンランド湾を海上封鎖してナルヴァ奪取を試みるが、ハンザ同盟が海上封鎖に怒り、それに呼応したデンマーク王フレゼリク2世率いるデンマーク軍がスウェーデンに侵攻する(コラム73)。

(当時のフィンランドはスウェーデン領で、ノルウェーはデンマーク領である。スウェーデン王エリク14世率いるスウェーデン軍がフィンランドからリヴォニアに侵攻し、デンマーク王フレゼリク2世率いるデンマーク軍がノルウェーからスウェーデンに侵攻した。ちなみに、1525年にアルブレヒト・フォン・ブランデンブルクがドイツ騎士修道会を解散してケーニヒスベルクとその周辺をまとめ、プロイセン公国を開国している。そして1562年にゴットハルト・ケトラーがリヴォニア騎士団を解散してクールラント・ゼムガレン公国(概ね現在のラトビア共和国)を開国している。アルブレヒトもゴットハルトもルター派プロテスタントに改宗していたが、ポーランド・リトアニア王に臣従した)

リヴォニア戦争と並行して、スウェーデンとデンマークの戦争=北方七年戦争(1563~1570年)が勃発した。他方、当時のポーランド・リトアニアは多数のキリスト教宗派が入り乱れ(コラム68で述べたように、カトリック教会とプロテスタント各派の教会だけでなく東方正教会やも存在した)、ポーランド・リトアニア王ジグムント2世(在位1548~1572年)はもっぱら国内問題の解消に尽力していた。

イヴァン4世は、北方七年戦争の勃発をクールラント・ゼムガレン公国に侵攻する好機であると判断したようである。彼はクリミア・ハン国と平和条約を結び、その後スウェーデンと休戦してデンマークと同盟を結ぶ。そして大軍を編成し、クールラント・ゼムガレン公国に遠征する。

だが、クールラント・ゼムガレン公国はポーランド・リトアニアの庇護下に入っている。遠征軍は1564年のウラ川の戦いでポーランド・リトアニア軍に大敗した。ウラ川の戦い後、クリミア・ハン国が平和条約を破棄する。モスクワ大公国の貴族たちがそれを知り、バルト海沿岸からの撤退とクリミア・ハン国への侵攻を主張しはじめた。それに対するイヴァン4世の回答は、非常大権の要求である。

(活版印刷技術の普及が西ヨーロッパ宗教改革運動のテコになったが、東ヨーロッパでも活版印刷技術が普及していた。イヴァン4世は活版印刷技術とポピュリズムを活用して非常大権を要求する。そのプロセスが、後に毛沢東が行った文化大革命とよく似ている。あるいは、毛沢東がイヴァン4世を模倣したのかもしれない。とはいえ、筆者が重視したいのは、「非常大権」そのものである。おそらく、イヴァン4世は近代史上初の独裁者である)

1565年、非常大権を獲得したイヴァン4世の恐怖政治がはじまる。イヴァン4世は1562年に新土地法を制定して直轄領=オプリーチニナを明確化したが、非常大権を獲得した後、直轄領を拡大する。そして自身が選抜した諸侯=オプリーチニキに分け与える。彼らは反抗する旧領主=貴族等を殺害し、地域の要人も殺害した。1566年、選抜会議がオプリーチニナ制度の廃止を嘆願するが、イヴァン4世は嘆願者を全員処刑する。

非常大権を獲得したイヴァン4世はモスクワ大公国を専制君主国家につくり変えたとも言える。だがクリミア・ハン国は専制君主など恐れない。1568年、アストラハン奪還を目指すクリミア・ハン国とオスマン帝国の連合軍がモスクワ大公国に侵攻する。しかしオスマン軍が越冬に失敗して撤退したため、この戦争=露土戦争(1568~1570年)は大過なく終結した。危機を脱したイヴァン4世はその後「ノヴゴロド虐殺」を断行する。

(1570年のノヴゴロド虐殺は、イヴァン4世がノヴゴロドとポーランド・リトアニアが同盟を結ぶと誤解したため生じたと言われているが、貴族だけでなく多数の民衆が殺害されている。おそらく、オプリーチニキたちが暴走した。当時のオプリーチニキたちは、イヴァン4世の手にも負えないくらいに激化していたように思う。ノヴゴロドは荒廃し、モスクワ大公国は「ロシアの玄関口」を喪失する。とはいえ、イヴァン4世にとって、バルト海沿岸のナルヴァが新しい「ロシアの玄関口」であった)

1569年、ポーランドとリトアニアが同君連合からひとつの国=ポーランド・リトアニア共和国になり、プロイセン公国とクールラント・ゼムガレン公国を属国化する。そして露土戦争で敗退したクリミア・ハン国と同盟を結ぶ。ポーランド・リトアニア王ジグムント2世はクリミア・ハン国に小銃や弾薬を供与した。

1571年、軍備を刷新したクリミア・ハン国軍は矛先をアストラハンからモスクワに変更し、ドン川を北上する。クリミア・ハン国軍の侵攻にモスクワの防衛を担っていたオプリーチニキたちは無力であった。彼らは本物の戦闘を知らない。軍事組織=クリミア・ハン国軍が警察組織=オプリーチニキ軍を撃破する。そしてモスクワを焼き払う。

モスクワ大公国は存亡の危機に陥るが、1572年にジグムント2世が死去したため、ポーランド・リトアニア軍がモスクワ大公国に侵攻する場面がなくなる。

モスクワ炎上後、イヴァン4世は選抜会議＝全国会議を開催する。そして貴族を中心に軍を再編し、モロディの戦いでクリミア・ハン国軍を撃退する。さらにオプリーチニナ制度を廃止し、役立たずのオプリーチニキたちを処刑した。その後非常大権を手放し、貴族の同意を得てポーランド・リトアニア共和国に侵攻する。

(ジグムント2世は、嫡子を残すことなく死去した。ヤギェウォ朝が断絶し、ポーランドとリトアニアの貴族たちはシュラフタ民主制下で国王自由選挙を行う。そしてフランス王シャルル9世の弟アンリを国王に選出するが、1574年にシャルル9世が死去したため、アンリは帰国してフランス王アンリ3世に即位する。ちなみに、モスクワ炎上の死者数は約80万と言われているが、イヴァン4世が処刑したオプリーチニキの人数も含んでいるように思う。イヴァン4世にとって、オプリーチニキの処刑は責務であった。他方、ポーランド・リトアニア共和国への侵攻は、モスクワ炎上の報復である)

だが、ポーランド・リトアニアの貴族たちは、コラム68で述べたステファン・バトリ(在位1575～1586年)をポーランド・リトアニア王に選出していた。ステファン・バトリ率いるポーランド・リトアニア軍がイヴァン4世率いるモスクワ大公国軍を蹴散らす。その後モスクワ大公国に侵攻し、モスクワ大公国第2の都市プスコフを包囲する。

イヴァン4世は、ローマ教皇庁に仲裁を依頼した。ロシア正教徒の依頼であったが、オスマン帝国の拡大を憂慮するローマ教皇庁は依頼に応じた。1582年、モスクワ大公国はポーランド・リトアニア共和国と講和し、バルト海沿岸の占領地をすべて返還する(ちなみに、ナルヴァは1581年にスウェーデンが奪取している)。

1583年、イヴァン4世はスウェーデンと講和し、約四半世紀続いたリヴォニア戦争が終結する。モスクワ大公国は疲弊し、イヴァン4世はバルト海沿岸に交易拠点をつくることもできなかった。翌1584年、イヴァン4世が死去し、彼の三男ヨードル(在位1584～1598年)がモスクワ大公ヨードル1世に即位する。

1590年、スウェーデン軍がカレリア地方に侵攻したが、摂政を担っていたボリス・ゴドゥノフ率いるモスクワ大公国軍がスウェーデン軍を撃退する。1595年、モスクワ大公国はバルト海沿に面するイングリヤ地方(現在のサンクトペテルブルクとその周辺)を獲得した。とはいえ、スウェーデンはナルヴァを占領し続ける。

1598年、モスクワ大公ヨードル1世が嫡子を残すことなく死去し、600年以上続いたリューリク朝が断絶する。その後ボリス・ゴドゥノフが即位するが、1605年に死去し、モスクワ大公国は動乱時代(大動乱)に突入する。

モスクワ大公国はイングリヤ地方を失い、ノヴゴロドも一時失う。動乱時代はミハイル・ロマノフ(在位1613～1645年)がロマノフ朝を開く1613年まで続いたと言われているが、ピョートル1世(在位1682～1725年)が即位する1682年まで続いたと考えるほうが妥当である。ちなみに、白海沿岸のアルハンゲリスクが動乱時代の「ロシアの玄関口」を担った(コラム73)。

1703年、ロシア＝モスクワ大公国はイングリヤ地方を奪還し、バルト海沿岸に交易拠点＝サンクトブルクを建設する。その後大北方戦争(1700～1721年)に勝利し、バルト海沿岸各地をスウェーデンから奪取する。それについては後述するが、動乱時代のロシア史の考察は本書の主旨から離れる。本書では、イヴァン4世が死去してピョートル1世が即位するまでのロシア史に深く言及しない。

(ミハイル・ロマノフの代に、モスクワ大公国は農奴制を強化するが、離農を抑止して民衆に食料を供給するための政策であったように思う。1600年にペルーのワイナプチナ火山が大噴火し、火山灰が太陽光を遮断してユーラシア大陸北西部が一時寒冷化した。モスクワ大公国で飢餓が勃発し、100万を越える餓死者が出る。スウェーデンでも飢餓が勃発している。ドイツやフランスの農業も打撃を被った)

ところで、歴史家たちは、イヴァン4世を「イヴァン雷帝」と呼び、彼の二面性や狂人性をしばしば強調する。だが、自身の大病や長男ドミトリの死、先妻アナスタシアの死がイヴァン4世を狂わせたと言論じることがあっても、時代がイヴァン4世を狂わせたと言論じない。

しかし筆者は、時代がイヴァン4世を狂わせたと考えたい。市場経済と重商主義の進展が世界を不幸にした。ロシア＝モスクワ大公国も例外ではない。15世紀後半～16世紀後半のロシア史は「広義の中世」の成熟期と「広義の近代」の出現期の重畳を考察する上で役立つ多くの事件を含んでいる。

コラム72: ビザンツ皇女ソフィヤ

ソフィヤは最後のビザンツ皇帝コンスタンティノス11世(在位1449~1453年)の姪であるが、ビザンツ帝国滅亡後、ローマに亡命している。1469年にローマ教皇パウルス2世がイヴァン3世との結婚を薦め、承諾した。

パウルス2世の目的は、東西キリスト教会の合同であり、彼女はイヴァン3世とロシア正教会を説得する役割を担っていた。だが、ビザンツ皇女が皇族と無縁な人物(すなわちローマ教皇)が立法者として君臨する世界を好ましいと思うはずがない。一部の歴史家が、彼女はローマ亡命後にカトリックに改宗したと論じ、モスクワをローマとコンスタンティノープルに続く「第三のローマ」にするつもりでいたと論じているが、彼女の胸中にローマはない。彼女はモスクワを「第二のコンスタンティノープル」にするつもりでいた。

彼女が嫁いだ頃のモスクワ大公国は異教や異端に対する寛容さが残っていた。彼女はそれに反発する。当然、彼女はビザンツ帝国を滅ぼしたイスラーム教に敵対したが、ユダヤ教や異端の排除にも加担した。おそらく、彼女はカトリック教会も排除するつもりでいた。フィレンツェ公会議に出席した元ニカイア府主教ヨハネス・ベッサリオンがモスクワを訪問して東西キリスト教会合同への協力を要請したが、彼女は承諾していない。その後彼女とイヴァン3世の息子ヴァシーリー3世がモスクワ大公国を「ビザンツ」化する。

コラム73: モスクワ大公国の対イングランド貿易

1553年、イングランド艦船エドワード・ボナベリンジャー号が白海(バレンツ海に面する巨大な湾)沿岸のアルハンゲリスクに寄港する。そして1555年、モスクワ大公国はイングランドと通商協定を結び、交易をはじめめる。

イヴァン4世は、イングランドから多量の大砲や小銃、火薬を輸入して軍を強化(あるいは近代化)するつもりでいた。しかし船舶がバレンツ海を航行できるのは夏季だけである。それが、モスクワ大公国軍がバルト海沿岸に侵攻してリヴォニア戦争が勃発した原因である。

モスクワ大公国の大軍がウラ川の戦いで大敗した後、イヴァン4世はイングランドに同盟を求めるようになる(エリザベス1世に求婚する場面もあった)。しかしイングランドに通商協定以外の条約をモスクワ大公国と結ぶ意志はない。焦ったイヴァン4世がイングランドとの交易を一時悪化させる場面もあった。